



史跡上野国分寺跡

発掘調査概要 6

1985

群馬県教育委員会

序

史跡上野国分寺跡の保存整備事業も6年目を迎え、発掘調査による寺域や伽藍の確認も進み、「国華」と讃えられた往時の様子も次第に明らかになってまいりました。今年度は塔跡の南側の調査において、創建時期に使われたとみられる建物の跡が見つかり、また寺の南辺の築垣が壊れた後に堅穴式の住居が造られていることからこの付近の荒廃の時期を知ることができた、等の成果を上げることができました。このことはこれらと古代の記録の内容とを照合することによって、国分寺の変遷をより具体的に知るための貴重な手懸りを得ることができ、史跡整備を進める上で大きな意味をもつと言えます。

この調査の概要を紹介し、今後の事業の進展の一助とするため本書を刊行しました。関係者をはじめ皆様に広くご活用いただければ幸いです。

最後となりましたが、本事業を進めるに当たって多大なご指導、ご協力を賜った文化庁、地元教育委員会などの各機関、また地元をはじめとする多数の方々々に深甚の謝意を表する次第です。

昭和61年3月31日

群馬県教育委員会教育長 千吉良 覚

目 次

<p>I 遺跡の位置と立地環境……………1</p> <p> 1. 位 置……………1</p> <p> 2. 立地環境……………2</p> <p>II 調査に至る経過……………3</p> <p>III 昭和55～59年度調査の概要……………3</p> <p> 1. これまでの調査と研究……………3</p> <p> 2. 昭和55年度の調査……………4</p> <p> 3. 昭和56年度の調査……………5</p> <p> 4. 昭和57年度の調査……………5</p> <p> 5. 昭和58年度の調査……………6</p> <p> 6. 昭和59年度の調査……………7</p> <p>IV 調査の概要……………8</p> <p> 1. 目的および調査方法……………8</p>	<p>2. 調査の経過……………10</p> <p>3. 第27次調査……………11</p> <p> (1) 遺 構……………11</p> <p> (2) 遺 物……………18</p> <p>4. 第28次調査……………24</p> <p> (1) 遺 構……………24</p> <p> (2) 遺 物……………25</p> <p>5. 第29次調査……………26</p> <p> (1) 遺 構……………26</p> <p> (2) 遺 物……………34</p> <p>V 文 字 瓦……………38</p> <p>VI ま と め……………41</p> <p> 図 版……………44</p>
---	---

例 言

1. 本書は、群馬県群馬郡群馬町東国分・前橋市元総社町他に所在する史跡上野国分寺跡の昭和60年度保存整備事業に伴う発掘調査の概要である。
2. 本調査は、国庫補助事業として群馬県教育委員会が実施した。
3. 本調査は、史跡上野国分寺跡整備委員会の指導を受け、群馬県教育委員会文化財保護課調査員前沢和之および調査補助員関口功一が担当し実施した。
4. 出土遺物については整理途中であるため、その一部に触れるにとどまる。
5. 出土した遺物は群馬県教育委員会が保管している。
6. 本書の作成、編集は前沢が担当し、遺構実測・写真撮影は前沢他が担当した。遺物実測および実測図トレースは関口他が担当した。

史跡上野国分寺跡整備委員会委員・幹事

<p>委員 大國軍之丞(委員長・県文化財保護審議会委員)</p> <p>坪井 清足(副委員長・奈良国立文化財研究所長)</p> <p>大塚 初重(明治大学教授・考古学)</p> <p>平野 邦雄(東京女子大学教授・古代史)</p> <p>近藤 義雄(県文化財保護審議会委員・中世史)</p> <p>藤井 精一(前橋市長)</p> <p>志村喜三郎(群馬町長)</p> <p>女屋 覚元(県総務部長)</p> <p>柳沢 宏(県土木部長)</p> <p>千吉良 覚(県教育委員会教育長)</p> <p>石田 重男(県教育委員会管理部長)</p> <p>退任 青柳 勇(前県総務部財政課参事)</p>	<p>幹事 田中 哲雄(奈良国立文化財研究所技官・史跡整備)</p> <p>福田 拓(造園家)</p> <p>松島 栄治(県立前橋第二高等学校教諭・考古学)</p> <p>富田 敏彦(県総務部財政事課参事)</p> <p>山本 肇(県土木部都市施設課参事)</p> <p>矢沢 隆資(県都市公園事務所長)</p> <p>森田 秀策(県教育委員会文化財保護課長)</p> <p>井上 唯雄(同 参事)</p> <p>近藤 功(同 埋蔵文化財第2係長)</p> <p>前沢 和之(同 調査員)</p>
--	--

I 遺跡の位置と立地環境

1. 位置

関東平野の北西隅、前橋市街の西方約4kmで、群馬郡群馬町東国分・同引間・前橋市元総社町に跨る位置にある。地形的には榛名山南麓に広がる扇状地の末端にあたり、南を染谷川、北を牛池川に挟まれる北西から南東への緩い傾斜を示す微高台地上に立地する。寺域の北西部は標高129.0m、南東部は127.5mを測る。西から妙義・浅間・榛名・小野子・子持・武尊・赤城の山々を眺み、南には平野が広がる景観をもつ。

史跡地の北側に町道、東と西側に小道が走り、南にはテラス状の平坦地が約100m続いて染谷川に至る。北側に群馬町東国分の集落が近接するが、南・東・西方は畑と水田で家屋は少なく、比較的良好な環境が保たれている。寺域内は北半部に民家と墓地があり、中央部には金堂と塔跡が土壇状に残る以外は畑地であり、かつては桑園であった。



Fig. 1 史跡上野国分寺跡と周辺の遺跡 1/50,000

2. 立地環境

東方約500mに国分尼寺跡がある。昭和45年に行われた調査で6×4間の講堂と推定される礎石建物が確認されているが、伽藍配置・寺域の範囲については不明な点が多い。現在は畑地となっており比較的良好な環境を保っているため、今後調査が行われればそれらも明らかにされることが期待される。南東約1.4kmには国府推定地がある。市街地化が進んでいるが、旧総社の跡とされる小祠などがあり、南面には推定東山駅路に接して人為的とみられる段差が認められる。また北東約1kmには7世紀後半の創建である山王座寺がある。ここには地下式の塔心礎や石製鷲尾・根巻石が残っており、「放光寺」とヘラ書きされた瓦が出土している。国分僧寺と尼寺の間を南北に貫くように建設されている関越自動車道の敷地の発掘調査では、縄文時代から近世まで各時代の遺構が検出されているが、奈良～平安時代の集落も多く確認されており、そこから出土した瓦や石材などの遺物と併せて国分二寺の立地や変遷と密接な関連を示している。そして、南約3.5kmの日高遺跡では広い範囲に条里制地割をもつ水田址が検出されている。これらの遺跡の所在から、この一帯が律令制下における上野国の中枢部をなしていたことが知られる。



Fig. 2 史跡上野国分寺跡全景 (昭和56年3月撮影)

II 調査に至る経過

上野国分寺跡は、平安時代中頃の記録が残る稀有な遺跡として知られており、大正15年10月20日付で史跡に指定された。指定面積は62,092㎡で寺域の南面部分も含んでいる。昭和43年に關越自動車道の基本計画が、その翌年には整備計画が発表されたが、それによるとこの自動車道は国分寺跡の東側約150mのところを南北に走り、南東約2kmのところには前橋インターチェンジができることになった。この開通により国分寺周辺への開発の波及は必至の情勢となり、群馬県教育委員会ではこの保存のため指定地の公有化を検討し、昭和47年度から地権者との折衝を開始した。その結果、史跡上野国分寺跡土地買上事業は昭和48年度から開始され、以後昭和60年度までに総事業費11億1,922万円、買上面積は51,463.35㎡で全体の82.9%となった。

この土地の買上事業の進展に伴い、昭和55年度から史跡上野国分寺跡整備委員会を発足させるとともに、遺構を確認し整備のための各種の資料を得るべく発掘調査に着手した。

III 昭和55～59年度調査の概要

1. これまでの調査と研究

国分二寺は天平13年(741)に造営が命じられたが、寺地の占定・工事などは難航した。天平19年(747)に督促の詔が発せられ、郡司層の力に拠って早期の完工を目論み、3年以内に塔・金堂・僧坊を完成させたならば、子孫は代々郡領に任用するとの条件が出された。「続日本紀」天平勝宝元年(749)紀には当国々分寺に知識物を献じたことによる叙位が5例記されているが、これは督促詔に対する記事と看做される。この内の2つが上野国分寺で、碓氷郡の石上郡君諸弟と勢多郡少領の上毛野朝臣足人の名が掲げられている。このことから上野国分寺は749年頃には伽藍の主要部分が完成したものと推定できる。また長元3年(1030)に作成された「上野国交替実録帳」には1020年頃の上野国分寺の衰退の状況がかなり詳細に記されている。それによると本尊である丈六釈迦仏などの諸像は破損はあるものの良好な姿をとどめていることから、金堂はまだ健全な状態であったとみられる。これに対して周辺の築垣や南大門、東大門、西大門などは、無実(滅失)となっていたことが記されている。これによって創建から約270年を経た時期には、伽藍主要部に較べて、縁辺部の荒廃が進んでいたことが知られる。このように上野国分寺は創建期と衰退期に関する史料が残されている稀有な例として注目されてきた。

上野国分寺についての研究は福島武雄「上野国々分僧寺址考」(「上毛及上毛人」53号 1921年)が嚆矢であり、宮地直一「上野国分寺に就いて(上)・(下)」(「史蹟名勝天然記念物」第1集第2・3号 1926年)では現地と史料とを照合する考究がなされた。その後相川龍雄「上野国分寺」(「国分寺の研究」所収 1938年)、太田静六他「上野国分寺伽藍の研究」(「建築学会論文集」27号 1942年)、太田「上野国分寺伽藍の諸性質(上)・(下)」(「史蹟名勝天然記念物」第18集第8・9号 1943年)では詳細な現地調査により金堂・塔などの規模の復元、伽藍配置と規模の推定などが行われ、現在に至る研究の基礎が提示された。また指定に伴う調査報告として内務省「上野国分寺址」(「埼玉茨城群馬三県下における指定史蹟」1927年)、群馬県「上野国分寺址」

（『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 1929年）があり、当時の現況が詳細に記されている。この他にも尾崎喜左雄「上野国上代寺院についての一考察」（群馬大学「史学会々報」第3輯 1949年）、石田茂作「東大寺と国分寺」（至文堂 1959年）、「上野国分寺」（『前橋市史』第1巻 1971年）、前沢和之「上野国交替実録報」国分寺項について」（『群馬県立歴史博物館紀要』1号 1980年）などがある。また出土した文字瓦については秋山吉次郎「国分寺址より出でし文字瓦に就いて」（『上毛及上毛人』77号 1923年）、相川龍雄「上野国分寺文字瓦譜」（1934年）、住谷修「上野古瓦文字考（上）・（中）・（下）」（『上毛及上毛人』218・219・220号 1935年）、相川「上野国分寺瓦の考察」（『考古学雑誌』第33巻第12号 1943年）などの報告と論考が発表されている。

上野国分寺に関するこれまでの発掘調査としては、北側の町道の拡幅に関連して南辺築垣の位置を確認するための小規模な調査が行われた（群馬町教育委員会『群馬町埋蔵文化財調査報告第1集 上野国分寺域縁辺の調査』1975年）のみである。周辺の調査としては、関越自動車道路線域の予備調査で僧寺と尼寺の間から「東院」の墨書のある須恵器塚が出土した（群馬県教育委員会『上野国分寺周辺地域発掘調査報告—僧寺・尼寺中間地域の考古学的検討』1971年）、また現状変更に伴う調査で史跡地西側の小道の西方において明らかに寺域外を示す状況が確認された（群馬県教育委員会『上野国分寺隣接地域発掘調査報告 奈良平安時代の竪穴住居跡等の調査』1979年）などがある。さらに尼寺跡の調査報告としては群馬県教育委員会『上野国分寺跡発掘調査報告書（昭和44年度調査概要）』（1970年）、同『同（昭和45年度調査概要）』（1971年）がある。現在報告書作成が進行中である関越自動車道路線敷地の僧寺・尼寺中間地域の調査抄報としては（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報1』国分寺中間地域Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡（1982年）、同『年報2』（1983年）、同『年報3』（1984年）がある。

2. 昭和55年度の調査

寺域および主要伽藍の配置の確認を目的とし、全域に第1～11トレンチ（幅3m）を設定して実施した。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

- ① 第1、9トレンチのS96～101で南辺築垣（SF01）が確認された。基底幅4.8～6m、上端幅（現状）1.5mで、高さは寺域内から0.7～1.4m、寺域外から1.3m～1.8mを測り、断面は台形状を呈す。地山を削り出し、その上に粘性のある黒褐色土を積んで造っているが、版築の状況は見られない。南側に接して幅約3.6mの浅い溝（SD01）がある。築垣の北側には瓦片を包含する層があり、この上に浅間山噴出のB軽石（以後、B軽石と略す）の純層堆積が認められる。
- ② 第11トレンチの塔跡に近い位置に瓦の集積があり、W1～3では8世紀後半の竪穴住居（SJ01）が検出された。また寺域の中央部を南北に走る細長い窪地は、深さ約2mの溝状に掘られたものであることが確認され、底部から五輪塔・馬骨などが出土した。

遺物 コンテナバット200個分が出土した。その大部分は瓦であるが、奈良～平安時代の土師器・須恵器・中世土器も出土しており、特に奈良三彩片の出土したことが注目される。

発掘調査と併せて、金堂・塔跡の現況実測図（1/50）の作成、航空測量用写真の撮影を実施した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡—寺域確認発掘調査概要—』にまとめて発表した。

3. 昭和56年度の調査

金堂周辺と東半部に第12～15トレンチ（幅3m）を設定し、検出状況に応じて拡張を行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第5トレンチN17・E132で100×70cmで上面が平坦な石1個を検出した。これは『史蹟調査報告第二』（内務省 1927年）などに記録されている礎石と同一とみられ、道路を挟んで東側にも同様な石の存在することが確認されている。金堂中心との距離は106.8mを測る、などの点からこれを東大門西側柱列の礎石の1つと推定した。東辺築垣は史跡地の東側に沿う農道に一致することが想定された。

② 金堂の北側—史跡地北辺の第12トレンチでは、地山を浅く掘り込み、周縁に玉石が散在する径約90cmの円形の掘形を2ヶ所で検出した。これを周辺の7ヶ所の円形掘形と玉石集積とを併せて検討した結果、中央部の間口420cm、その両側が390cm、奥行は4間で330cm等間、中軸線は金堂とほぼ一致することがわかり、これを講堂跡（SB06）と推定した。金堂とは中心—中心で4,710cmを測る。桁行の両側部分は攪乱のため検出できず、また基壇の痕跡も確認できなかった。

③ 塔跡東側の第11トレンチを拡張し、S9・W1で径約80cmの円形土壌内に玉石が密集してあるのを検出した。金堂の西側柱列から14.5mの位置にあり、西面回廊の礎石根石の可能性がある。

④ 塔跡と中軸線を挟んで東に相対する第15トレンチでは、地山が窪地状となっており、夥しい量の瓦が山積み状にあった。この中には壁土・漆喰片・木炭片が混じり、下部からは溝状の切り込みをもつ凝灰岩切石が出土したことから、建物の部材が一括して廃棄された状況が想定された。

遺物 瓦を主に、コンテナバット110個・20kg入飼料袋497袋分がある。土器片では奈良三彩片、「福」と墨書する須恵器碗、内面に輪宝を墨書する中世の素焼きの皿など、また円面硯・瓦塔などがある。文字瓦は300点近くあった。石造物は宝篋印塔・五輪塔など70点の出土をみた。

発掘調査と併せて、航空測量による地形図（1/200、1/500）を作成した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要2』にまとめて発表した。

4. 昭和57年度の調査

第16～19次調査を、寺域南東隅周辺の確認、塔基壇と西面回廊の確認を目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第16次調査は南辺築垣（SF01）と東辺築垣との交点と推定される部分とその南側で行った。地山はS100～101で階段状に削られ、南に向かって次第に低くなっていく。これは築垣基部の造作

とみられるが、この南側は染谷川に向って広がる谷地形となっている。この谷地の土層の中位にはB軽石の純層堆積があり、谷地の縁辺部には踏み固められた状況があって、B軽石堆積以前に改修がなされていたとみられる。以上のことからこの谷の北縁上を南辺として寺地の占定がなされたことが窺える。

② 塔跡南東側の第17次調査では、一帯に軽石混黒褐色粘質土の盛土があり、これがW12-13を境として塔跡寄りでは一段低くなっており、一面に瓦片と土器類が散布している状況が確認された。W7-10で金堂と方位を同じくする梁行2間(3.45m)の掘立柱建物(SB09)9間分が検出され、西面回廊の一部である可能性が考えられたが、南面回廊の部分は確認できなかった。

③ 金堂跡西側の第18次調査では、SB09の北側への延長および金堂への屈曲部は検出されなかった。N5・W7付近で2×3間の掘立柱建物(SB08)を検出し、また塔跡の北東約23mで竪穴式住居1軒(SJ08)を検出した。金堂の西側の部分には中世に属する墓塚7基があり、国分寺廃絶後金堂周辺が墓塚化していたことを窺わせる。

④ 第19次調査では塔基壇の規模と構造の確認を目的とした。この結果、基壇は一辺長1,920cm(64尺)、側柱列からの出は420cm(14尺)で、旧表土を掘り込んで版築状に盛土をし、標高129mを基部として角閃石安山岩切石を積み上げて側面の化粧をしている。礎石上面は標高130.25~130.34mであることから基壇の高さは120cm(4尺)前後であるとみられる。

遺物 瓦を主に、コンテナバット300個・飼料袋1,200袋分が出土した。

発掘調査に併せて「史跡上野国分寺跡整備基本計画」を委託して作成した。これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要3」にまとめて発表した。

5. 昭和58年度の調査

第12トレンチ拡張・第20~23次調査を、南大門の確認などを目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第21次調査は史跡地北西隅の墓跡で、金堂中心から1町の線上(N133.9)にかかる位置で行った。ここは周辺より一段高い地形となっており、築垣の遺存することが期待されたが、地表下20cm程度で砂質土の地山となっていた。このため築垣は残存していなかったが、N130から北側が僅かに高くなり、N136から北に向って急に低くなっている状況が検出された。最終的には金堂中軸線から北側へ1町の位置で、現在道路舗装の下にあると伝えられる礎石の確認をまたねばならないが、北辺築垣は金堂中心から1町の位置にある可能性が高いと判断される。

② 第23次調査は南大門の確認を目的として行ったが、東妻側の礎石3個と基壇、それに取りつく南辺築垣などが検出された。礎石は両側の心中心距離が630cmで、南辺築垣の東半分はこの中心部に取りつく。築垣は地山を削り出した上、基部幅200cmで粘質土を1単元3~5cmで版築様に積み上げている状況が認められた。また1ヶ所のみであるが寄柱とみられる柱穴1対を検出した。この調査の結果から、(1)南大門で検出された礎石の方位は南辺築垣の方位と約4°の振れをも

ち、塔とはほぼ同方向を示す、(2) 現状の礎石による奥行きは630cm (21尺) であるが、これは「上野国交替実録帳」の記載と異なる、(3) 南大門基壇は改修の行なわれた形跡があり、古い段階では南辺築垣と方向を同じくするものとみられる、(4) 南辺築垣の西半部は東半部に対して北側に振れる方位をもつ可能性がある、(5) これまでの伽藍配置の想定と異なり、南大門は南辺築垣から内側に入って造られていた状況は認められない、(6) 南大門の東約28mの所に方位を同じくする680×560cmで南北に長い基壇とみられる遺構がある、などの点が確認された。

遺物 瓦を主に、コンテナバット300個分以上が出土した。南大門周辺には瓦溜があり、多数の文字瓦が出土したが、この中には「物部」・「大伴」などの人名、「山字」・「辛□」・「八田」など多胡郡に関係する地名の多いことが注目された。

これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要4」にまとめて発表した。

6. 昭和59年度の調査

第23次西拡張・第15トレンチ拡張・第24-26次調査を、寺城南西隅部の遺構と築垣の状況・金堂基壇の規模と構造の確認を目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

- ① 第15トレンチ拡張調査では、S15-20・E80-88で瓦溜りの南半部を検出した。瓦溜りは南北約11m・東西約8mの範囲に、中心部の厚さ約70cmで瓦片が山積状になってある。この中からは漆喰を伴う壁土塊、塑像片、凝灰岩切石などとともに内耳銅型土器、石白などが出土しており、中世に金堂の廃材を廃棄したものとみられる。この付近からは、9世紀前半に属する竪穴住居(SJ15)、国分寺存続期の「V」型溝(SD04)が検出されている。
- ② 第24次調査では、S87.6-90・E60-64.4で南辺築垣の残部を検出したが、平安時代に修造のなされた状況が認められる。この内側には10世紀初め頃の竪穴式住居が2軒(SJ13・14)があり、この修造に関連する可能性がある。またS51-56・W70-75で2×2間の掘立柱建物(SB11)を検出したが、これは奈良時代に属するものとみられる。
- ③ 第25次調査では、金堂の規模は桁行が7間で柱間は11-11-12-12-11-11尺、梁間が4間で柱間は11-11.5-11.5-11尺であり、基壇の出は11尺であることを確認した。基壇化粧は不明であるが、凝灰岩切石による可能性が強い。基壇上面と南面には多数の墓塚が造られており、傷みが目立つが、本尊の背面の位置で来迎壁の地覆石を確認することができた。
- ④ 第26次調査では、金堂の西方で土器などを廃棄した土壇(SK33)などが確認された。またこの付近では中世のものとみられる多数の小柱穴、土壇と井戸などが検出され、後世に住居区域として利用された状況が認められる。

遺物 瓦を主に、コンテナバット300個分以上が出土した。金堂跡周辺からは五輪塔などの石造物が多数出土している。これ以外には、塑像片、金銅製飾金具、鉄製鉸具などがある。これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要5」にまとめて発表した。

Ⅳ 調査の概要

1. 目的および調査方法

目的 昭和55～59年度の調査の成果にもとづき、整備のための具体的な資料を得るために次の諸点を目的として実施した。

- ① 塔跡南側の旧地形と整地作業の状況の確認。
- ② 南辺茶垣の位置と構造の確認。
- ③ 南大門南側の参道の有無の確認。
- ④ 中門の残存状況および金堂跡南側の遺構の確認。

調査方法 基本的には昭和55～59年度と同じである。

- ① 昭和56年度まではトレンチによる調査を主とし、状況に応じてこれを拡張する方法をとり、第1～15トレンチを設定した。昭和57年度以降は発掘区域を面的にとるためトレンチの名称を廃し、「第〇次調査」と称している。
- ② トレンチ名称との混同を避けて第16次調査から始め、以後調査順に第29次調査まで実施した。
- ③ 調査基準線は国土調査法による第Ⅸ座標系 $X = +43,750.0$ 、 $Y = -72,500.0$ を基準点として、座標北より4°西偏させて設定した。ただし本書における方位は、国土座標によって表示している。
- ④ 各調査区域・遺構の座標値は、基準点を(0・0)とし、東・西・南・北をE・W・S・Nとして、これからの距離(m)でもって表示した。
- ⑤ 遺構の配置などの検討にあたっては1/200および1/500地形図を使用した。
- ⑥ 遺構は次の分類記号によって表示し、それぞれの遺構ごとに一連番号を付した。

S A : 柱穴列など S B : 建物 S D : 溝・濠 S E : 井戸 S F : 築垣・塙 S J : 堅穴式住居 S K : 土塹 S T : 墓塚 S X : 性格不明

Table 1 調査区の位置と目的

発掘調査面積 1,725㎡

調査次	位 置	目 的	備 考
27	塔跡の南側・南辺茶垣および寺域外も含む S 45-112・W 34-41 S 61-77・W 40-60 S 65-68・E 16-W 75	旧地形の確認 造成・整地状況の確認 遺構の有無の確認 南辺茶垣の位置と構造の確認 寺城南側の状況の確認	調査面積 883.5㎡ 昭和55年度調査第2トレンチの西側隣接地
28	南大門跡の南側・溝状窪地内 S 107-110・E 19-26 S 117-120・E 19-26 S 127-130・E 21-25	寺城南側の参道の確認 溝状掘り込みの状況の確認	調査面積 54㎡
29	金堂跡の南側 N 13-S 38・E 22-32 S 13-19・E 14-39 S 20-38・E 16-36	金堂南側の参道等の確認 中門の位置と遺存状況の確認 墓塚等の分布の確認	調査面積 787.5㎡

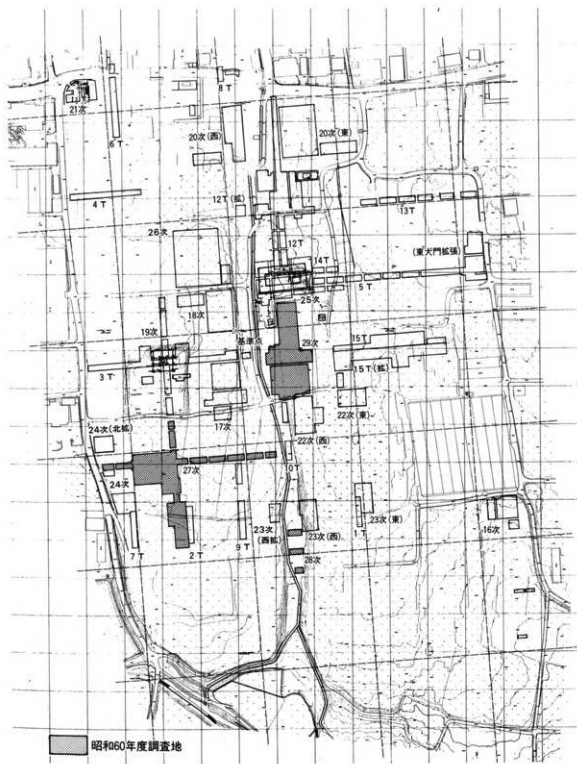


Fig. 3 遺跡全体図・トレンチおよび調査区位置図 1/2,000

2. 調査の経過

本年度の発掘調査は、昭和60年7月15日から昭和61年3月5日まで実施し、同3月6日からは資料および出土遺物の整理を行っている。以下、その経過を月ごとに略記する。

5月 これまでの調査で出土した資料の分類、復元作業、実測などを行う。

6月 文字瓦の整理作業などを進める。調査計画の検討を行う。

7月 調査事務所および収蔵庫の移転作業を行う。15日より第27次調査に着手する。S66・W50付近で掘立柱建物の柱穴掘形が検出される。

8月 掘立柱建物（SB12）の全容を確認する。二面廂建物としては初めての確認例となる。また柱穴掘形は3軒の竪穴式住居の覆土・カマドを切って造られていることが明らかとなる。W10付近の土層の観察により、この周辺では自然堆積の黒色粘質土の上に暗灰褐色土および軽石混り黒褐色粘質土を盛土して造成のなされていることがわかる。

9月 S93付近で南辺築垣の基部が削平された状況で検出される。基部は自然堆積の黒色粘質土を掘り込んで、その上に粘性の強い軽石混り黒褐色土を積み上げて造っていることがわかる。南辺築垣外側の溝を確認する。寺城南側のS10付近で竪穴式住居1軒を検出する。

10月 南辺築垣の基部を切って造られた竪穴式住居2軒が検出される。このことから、南辺築垣は11世紀初めには完全に崩壊していたことが明らかとなる。22日より第28次調査に着手する。

11月 28次では参道は確認できず、耕作土の下は階段状に掘り込まれた溝となることが明らかとなる。27次の一部拡張調査を行う。16日に「文化財の集い」・現地説明会を開催する。20日より第29次調査に着手する。耕作による攪乱は黄色ローム面にまで達し、またロームを掘り込む小溝が多数ある。S34・E23で礎石の根石とみられる偏平な玉石の集積が検出される。

12月 金堂の南側は黄色ロームの地山が南に向って下がっており、表土層は薄く、耕作による攪乱が著しい。根石状遺構は中門の痕跡である可能性が考えられる。12日に整備委員会幹事会議を開催する。

1月 金堂の南側で竪穴式住居が3軒、土壘が2基検出される。竪穴式住居は上部を削平されているが、内部から出土する土器により8世紀初め頃のものであることがわかる。また多数の長方形の墓塚が検出され、この中には五輪塔および礎が多数埋め込まれる状態であった。

2月 29次の実測と遺物のとり上げ、27次、29次の遺構断ち割り調査を行う。7日に整備委員会を開催する。出土遺物の整理を行う。22日から埋め戻し作業を開始する。

3月 4日に埋め戻しおよび整地作業を終了する。調査用機材の整理を行う。実測図・写真等の整理、出土遺物の復元・実測、文字瓦の拓本とり、検索用カードの作成を進める。

猛暑の夏から厳寒の冬に及ぶ調査の間、学校・郷土研究会、史跡探訪グループ、公民館主催の団体、研究者、文化財関係者など多数の来訪者があった。また11月の現地説明会には500名近い参加者があった。これらに対しては極力案内・説明を行うように努めたが、十分になし得たとは言い難く、今後この点に関しても積極的な対策を考慮すべきことが痛感された。

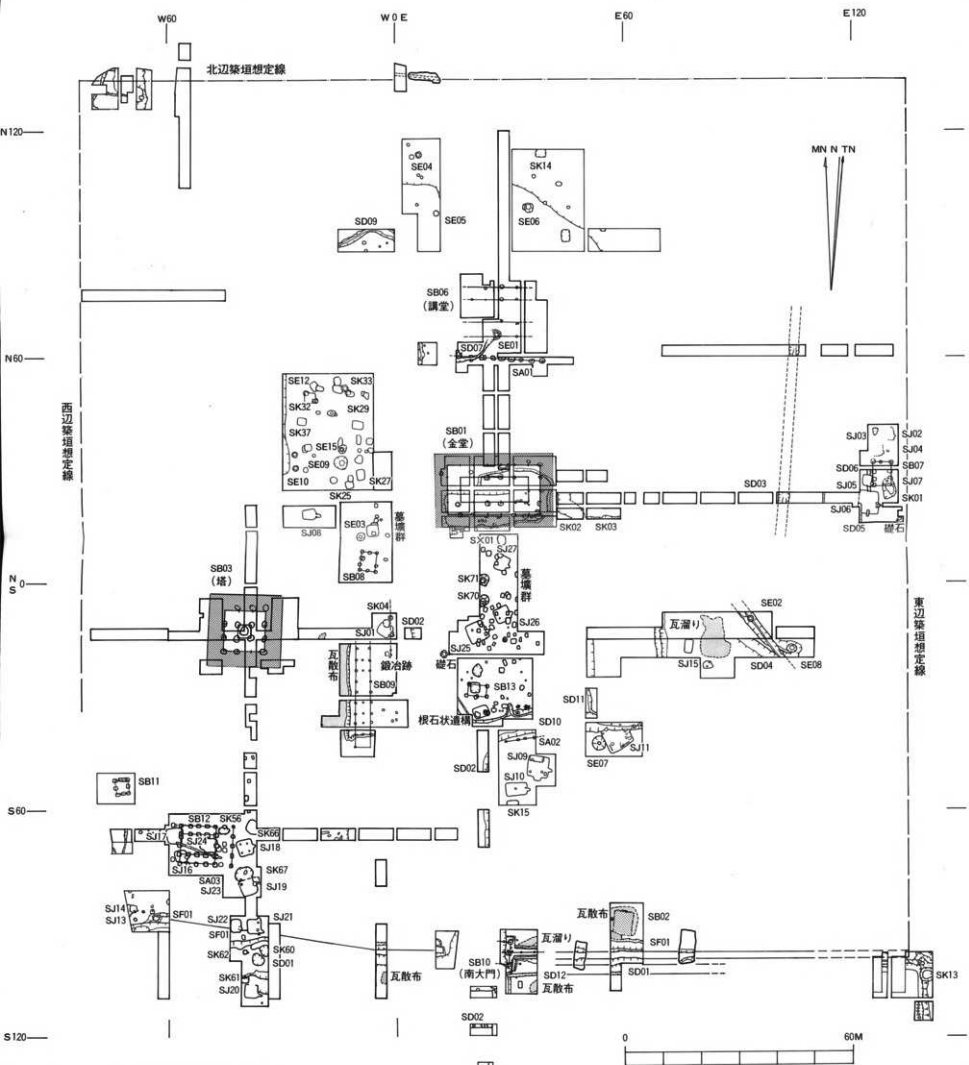


Fig. 4 史跡上野国分寺跡遺構全体図 1/1000

3. 第27次調査

(1) 遺構

寺域南西部については、昭和59年度の第24次調査で南辺築垣の位置と構造、その北側に造られた掘立柱建物1棟(S B11)、竪穴式住居2軒(S J13・14)の所在を確認した。これによってこの付近には建物遺構の存在していることが推定された。このため塔跡の南側付近の旧地形と造成の状況を調べるとともに、遺構の確認を目的として調査を行った。

寺域中央部のS65・E16付近では自然堆積最上層の軽石混り黒色土が標高127.45m付近にあり、この上部に厚さ20cm前後(現状)で軽石混り黒褐色粘質土が堆積している。この層中には小礫とともに瓦小片が少量含まれており、造成による盛土と看做される。この盛土の上半部は耕作により攪乱をうけている。S65・W12でこの状況を見ると自然堆積層上面は127.35mにあり、この上部に厚さ30~40cm(現状)で盛土のあるのが認められる。S65・W44周辺では、127.15m付近に黒色粘質土と暗黄褐色粘質土の混合した面があり、この面で遺構が検出された。この上部には焼土粒や瓦片を含む軽石混り黒褐色粘質土が厚さ30cm前後で堆積し、この上面は部分的に踏み固められたように固くなって、淡黄褐色細粒土塊が散布している。このことから国分寺期の表土の上部が一度削平をうけた後に、この層の堆積があり、127.50m前後の位置で一度生活面を形成していたものとみられる。

今回の調査では、古い段階での削平と耕作による攪乱のため遺構の傷みが目立ったが、北半部で掘立柱建物1棟(S B12)、柱穴列1基(S A03)、竪穴式住居6軒(S J16・17・18・19・23・24)、土壇など、南部で南辺築垣の一部(S F01)、溝跡(S D01)、竪穴式住居3軒(S J20・21・22)、土壇などが検出された。また寺域の南外側の状況の一部を確認することができた。

S B12 塔跡の南南西56m付近のS63~74・W47~57で掘立柱建物1棟が検出された。柱穴掘形の検出面は、黒色粘質土と黄褐色粘質土の混合層で、標高127.25mにあたる。構造は身舎が4×2間の東西棟で、南北に廂がつく。規模は身舎が930×530cm、廂の出は240cmで、総長は930×1,010cmとなる。柱間は桁行が240cmであるが、南側列の東から3間目と北側列の東から2間目は210cmとなっている。梁間は265cmの等間である。方位はE-1°45'-N(N-1°45'-W)を示す。柱穴掘形は、身舎が105×100cm前後の方形、廂が90×70cm前後の長方形を呈し、深さは現状で20~40cmと浅めであり、上半部は削平をうけたものと考えられる。埋土は黄褐色土小塊を含む黒褐色粘質土を主体とし、よくしまっており、瓦片の包含はみられない。柱痕については、平面で柱痕状の不整形の土の変化が認められるが、この部分には黄色土混りの黒褐色粘質土が入っておりしまっている。断面の形状を考慮すると、柱を抜き取った後にその部分が埋戻されたことが推定できる。また掘形には重複、建て直しの状況は認められない。これらの柱穴掘形は、3軒の竪穴式住居(S J16・17・24)のカマドおよび覆土を切って造られている。また身舎北東隅の掘形は不整形の土壇(S K56)によって一部を切られた状況を示している。この建物の方位は塔の方位N-1°22'-Wに近似し、また東側柱列は塔の西側柱列の南への延長線上にはほぼ一致する。

このことと柱穴掘形の検出状況とから、SB12は奈良時代に属するものである可能性が高い。
 SA03 SB12の東側456cm、S64-74・W43で柱穴列が検出された。検出面はSB12と同じであるが、黒色味が強くなっている。柱穴が5個、南北方向で1列に並んでおり、南端と北端はSB12の南・北廂柱穴列の東への延長線上にはほぼ一致する。総長は1,020cmで柱間は240cmと270cmとが交互にある。方位はN-1°45'-WでSB12と一致する。柱穴掘形は、65×55cm～85×75cmの不整長方形で、深さは現状で20cm前後と浅い。埋土は黄褐色土小塊を含む黒褐色粘質土を主体とし、よくしまっている。柱痕は、掘形平面で不整形の土の変化が認められ、この部分には黒褐色粘質土が入りしまっている。また柱穴掘形には、重複・建て直しの状況は認められず、検出状況はSB12によく似る。SA03はSB12の東側廂の柱穴である可能性も残るが、南北廂に較べて掘形が小ぶりであり、SB12の東側柱列からの距離が大きいの点で、SB12に関連した区画施設ないしは目隠し塙的なものであると推定される。

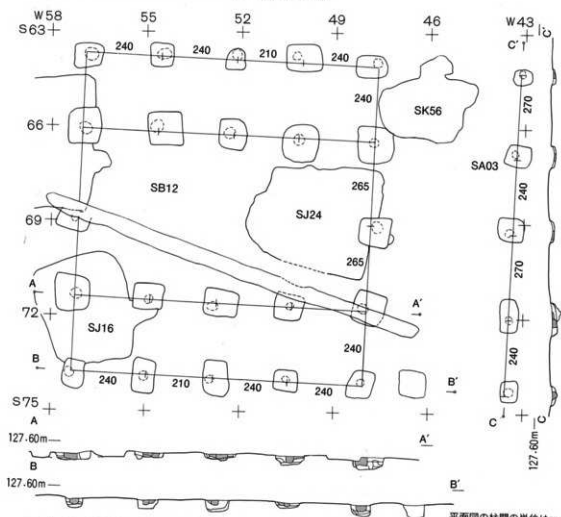


Fig. 5 SB12・SA03 1/120

平面図の柱間の単位はcm。
 断面図のアミの部分は柱抜き取り痕を示す。

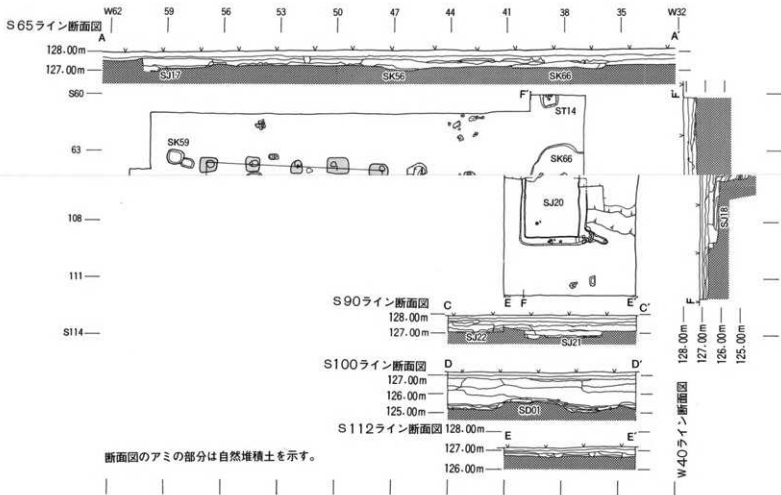


Fig. 6 第27次調査区主要部 1/200

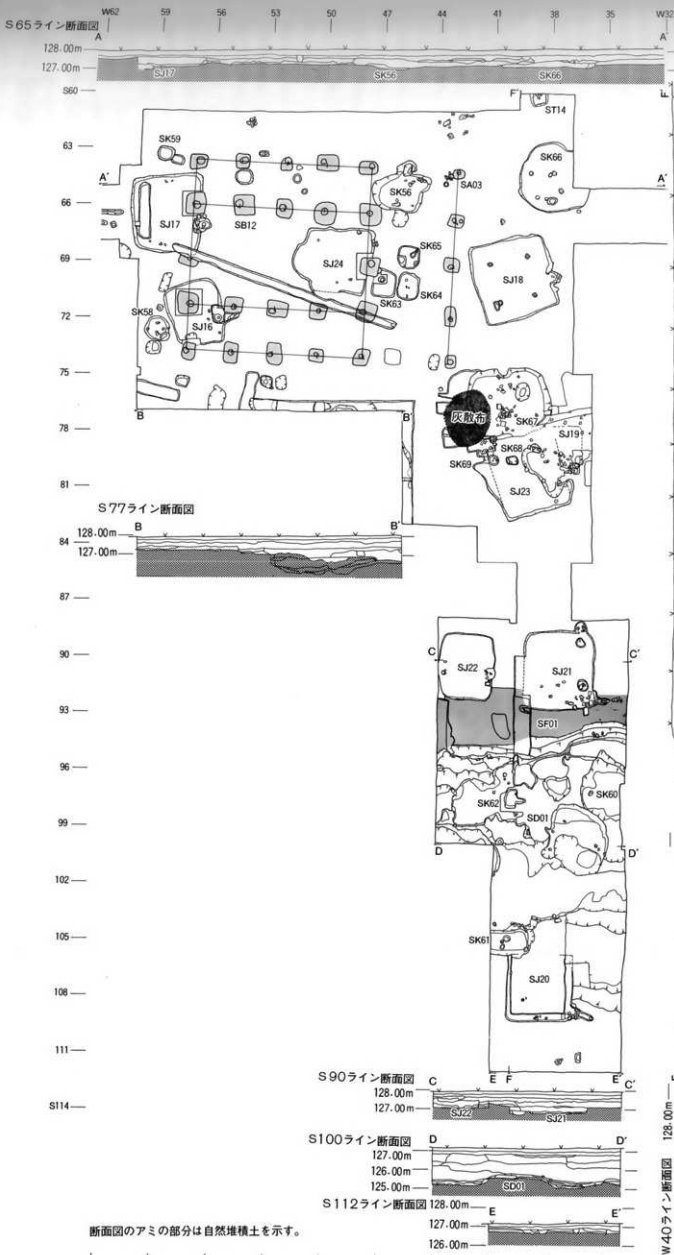


Fig. 6 第27次調査区主要部 1/200

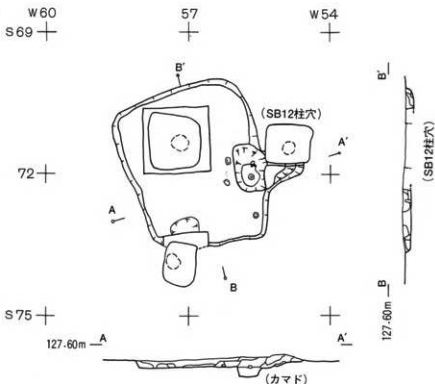


Fig. 7 S J 16 1/80

S J 16 S 70-73・W55-58の暗黄褐色土と黒褐色粘質土の混合する面で検出された。規模は330×260cmで南北に長い不整形長方形を呈し、深さは現状で20cm前後と浅い。方位はE-23°-Nを示す。東側壁中央部に地山の黄色粘質土を素掘りしたカマドが設けられているが、壁面の焼化はさ程進んでいない。壁は上半部が削平されたものとみられるが、立ち上がりはやや緩い傾斜である。床面は地山の黄色粘質土中に造られており、黒褐色土が少量混じりしまった状態で、平坦である。柱穴、貯蔵穴および壁下の溝は検出できない。覆土は、壁近くは地山の黄褐色を含む黒褐色土で、内部は黒褐色土を主体とし、しまった状態である。人為的に埋められた可能性もある。遺物の出土は少なく、カマド近くで土師器杯の完形品2点が目立つ程度である。これらの出土遺物から、住居の時期は8世紀初頭から中葉と判断される。覆土の北西部、カマドの北半部、南側壁の西端部をS B 12の柱穴掘形によって切られている。

S J 17 S J 16の東側約2mの、S64-68・W57-60にあり、検出面はS J 16と同じである。規模は390×350cmで南北に長い不整形長方形を呈し、深さは現状で30cm前後である。方位はE-4°-Nを示す。東側壁中央部にカマドが設けられているが、地山を床面より35cm程度掘り下げ、焚口袖の両側に自然石を立て、この内側には土師器のカメ片が張り付いた状態であり、また上部に長カメを2個重ねた形状で差渡して造られている。壁の立ち上がりは急である。床面は地山を掘り下げて、その内部に黄褐色土混りの黒褐色粘質土を盛った貼り床で、東から西に向って僅かに

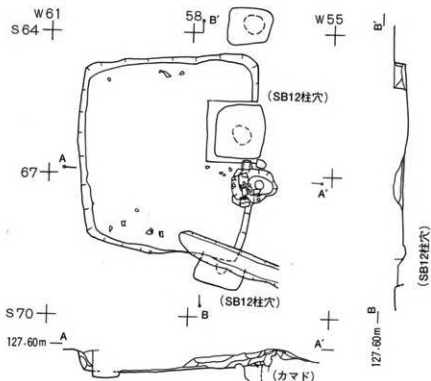


Fig. 8 SJ 17 1/80

下がるが平坦であり、しまっている。柱穴・貯蔵穴および壁下の溝は検出できない。覆土は、床面直上には土師器片などを含む黄褐色土混り黒褐色粘質土が厚さ4cm前後でしまった状態であり、その上部は地山の黄色土を多く含む暗褐色土を主体とししまっている。全体に焼土が斑点状に含まれている。遺物は、カマド焚口の芯材として使用されていた土師器長カメがほぼ完形であるほか、カマドの内部と周辺に土師器片の散布がみられる。また北側壁近くの床面上からは、土師器片とともに鎌とみられる鉄器1点が出土している。これらの出土遺物から、住居の時期は7世紀末から8世紀初頭と判断される。住居のカマドの北側の壁と覆土はS B 12の柱穴掘形によって切られており、また南東隅部は後世の溝によって破損している。

S J 24 S J 17の東南東約6mのS67-70・W47-51にあり、暗黄褐色粘質土を含む黒色味の強い粘質土面で検出された。規模は340×310cmで東西に長い不整長方形を呈すが、西側壁には弧状の張り出しが設けられている。深さは現状で25cm前後と浅い。方位はE-1°30'-Sを示す。東側壁中央部に素掘りのカマドが造られているが破損が進んでおり、構造の詳細は不明である。壁の立ち上がりは急傾斜である。床面は地山を皿状に掘り下げた内に、縄文土器小片、焼土を含む軽石混り黒褐色粘質土を主体とする土を盛った貼り床で、ほぼ平坦であるがしまりは弱い。柱穴、貯蔵穴および壁下の溝は検出できない。覆土は、軽石混り黒褐色土を主体とし、焼土を少量含み、ややしまった状態である。この覆土は周辺の低地および窪地に盛られた造成のための土と同質で

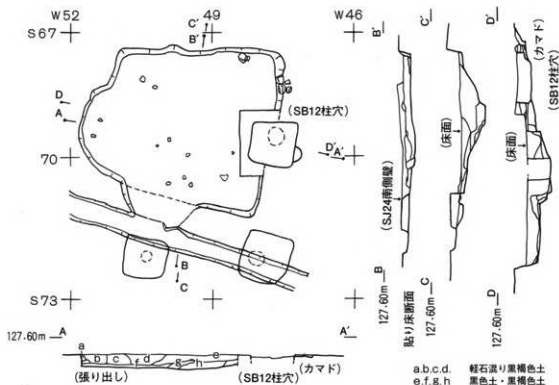


Fig. 9 SJ 24 1/80

あり、状況からみて人為的に埋められたものである可能性が高い。遺物の出土は少なく、床面上に土師器小片が数点、覆土中に土師器小片が僅かにみられる以外には、東側壁北半部周辺に20cm大の礫が5個ひとまとまりであるのが目立つ程度である。これらの遺物から、住居の時期は8世紀前期から中葉と判断される。カマドの大部分および東側壁の中央部は、S B 12に柱穴掘形によって切られている。このこととS J 16・17の状況とを考慮すると、S B 12の存続時期の上限は8世紀中葉であることを示している。

以上の遺構以外にこの付近では、S 65-72・W 38-42で竪穴式住居 (S J 18・7世紀末から8世紀初頭)、S 64-66・W 44-47で皿状に掘り込まれ、大型の瓦片を含む土壌 (S K 56・平安時代) 縄文時代中期の土器小片、打製石斧などを含む小土壌 (S K 63・64など) が検出された。またS 75-83・W 37-43の範囲では、竪穴式住居2軒 (S J 19・時期不詳、S J 23・9世紀)、大型の瓦片を多く含む土壌 (S K 67・平安時代)、円形焼土壌 (S K 69・平安時代) などが確認されている。このS J 23周辺は遺構の重複関係が複雑であり、また覆土が地山と同質のものであるため各遺構の範囲と構造を明確に据えることは困難であったが、大型瓦片が多量に散布すること、焼土の散布が多く灰層の形成がみられること、銅の溶解に使用したとみられる増埒片が出土していることなどから、国分寺存続期に工場として使われていた可能性が考えられる。

S F 01 塔の南側約82mのS 92-95の位置で南辺築垣の一部を確認した。築垣の本体は完全に削

平されているが、基部の造成の状況を知ることができた。標高127.15m付近にあり旧地表面とみられる自然堆積の黒褐色粘質土を、断面逆台形状に約70cm掘り下げて固くしまった黄褐色土中に底面を造り、その内部に軽石混り黒褐色土を主体とする粘性の強い土を積み上げている。さらに地表面上に断面台形状に20cm以上高く盛り上げて造っており、この上面は現状で127.33mにある。この積み土の底部には僅かではあるが瓦小片が混じっている。基部の上面は攪乱をうけているため詳細は不明であるが、幅180cm以上の平坦面が造られ、その上に本体が築かれていたとみられる。南縁は盛土と自然堆積を57°(現状)の急角度で掘り下げて、さらに地山の灰黄色砂土を浅く掘り込んでいる。この南縁外側は溝(SD01)となる。方位は後世の変更が著しいため詳かでない。位置は南大門東側のE35.7ラインではS97-100、南西隅のW63ラインではS87.6-90であるのに対し、ここではこの中間にあって、南辺築垣西半部が屈曲していることを示している。残存する基部の上面には、局部的にはあるが浅間B軽石が圧縮された状態であり、またこの上部には浅間B軽石を多量に含む層が形成されている。

SJ21 S88-93・W36-39にあり、南側壁に近い部分はSF01基部盛土の北縁部を切って造られている。この基部盛土の上面は127.30mにある。規模は410×355cmで南北に長い長方形を呈し、深さは南側壁部で47cmを測る。方位はE-6°-Nを示す。北側壁東端に半円形に素掘りしたカマドが造られているが、これは粘質土で埋められた状況が認められ、東側壁南端に新たに造り替えられたものとみられる。この後出の東カマドは、平瓦を「 Γ 」に組んで焚口を造っており、煙出し口付近にも瓦片を使用している。自然石の支脚を備え、壁面の焼化は進んでいる。柱穴は検出されないが、北カマドの南側、東カマドの北西側には径約50cm・深さ20cm前後の円筒形の穴が掘られている。壁の立ち上がりは垂直に近い。壁下の溝は確認されない。床面は軽石混り黒褐色

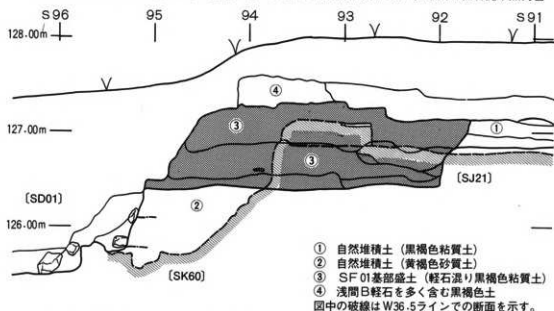


Fig.10 SF01 W40ライン断面図 1/40

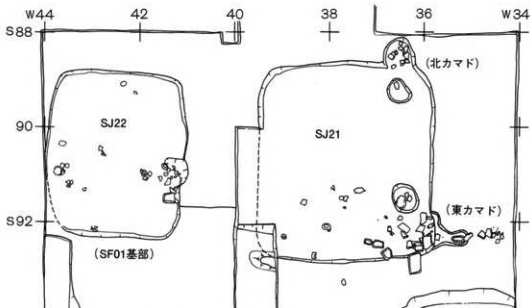


Fig.11 SJ 21・SJ 22 1/80

粘質土中に造られており、小さな凹凸がみられるが全体に平坦である。覆土は焼土を含む軽石混り黒褐色粘質土を主体とし、土器片・瓦片が混じる。遺物はカマド内部および周辺から多数の大型瓦片と土師器片が出土しており、床面上前半部にも数個の土器片がある。これらの出土遺物から、この住居の時期は11世紀前半と判断される。

S J 22 S J 21の西側約150cmの位置、S 89-92・W 41-44にあり、南側壁に近い部分はS F 01基部盛土の北縁部を切って造られている。この基部盛土の上面は127.35mにある。規模は330×285cmで南北に長い長方形を呈し、深さは南側壁部で35cmを測る。方位はE-2°-Sを示す。東側壁中央部に半円形のカマドを設ける。焚口の両袖には砂岩切石を立て、内部壁面は平瓦を立てて造っている。柱穴、貯蔵穴および壁下の溝は検出されない。壁の立ち上がりはやや緩い傾斜をもつ。床面は軽石混り黒褐色粘質土中に造られており、しまっている。覆土は軽石混り黒褐色粘質土を主体とし、土師器および須恵器・瓦片を含む。遺物はカマド内部および周辺から土師器片、羽釜などが出土し、床面上には須恵器片、土師器杯などが散在する。これらの出土遺物から、この住居の時期は11世紀初頭と判断される。

以上の検出状況から、S J 22が使用されていた11世紀初頭には、既に南辺築垣の本体および基部盛土の上部は崩壊していたことが明らかとなった。

以上の遺構以外にこの付近では、S F 01の南縁部を壊して造られた上部径約7mの大土塼(S K 60・中世)、S D 01底部の地山を掘って造られた火葬に使ったとみられる長方形の焼土塼(S K 62・中世とみられる)、寺域南側の旧表土面で検出された竪穴式住居(S J 20・11世紀前半)などがある。

(2) 遺物

塔の南側の整地土である軽石混り黒褐色粘質土中には、少量であるが縄文時代中期の土器の小片とともに打製石斧、石片などが含まれている。またS B 12付近の土壌（S K 58・63・64など）の埋土中にも同様な縄文時代の遺物が含まれているが、この付近ではこの時期の遺構は確認されていない。

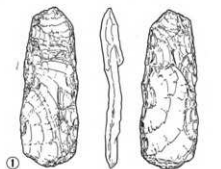
S J 16からはカマド内部と、カマド南側の床面よりやや高い位置から土師器杯の完形品が2点

Table 2 第27次調査区出土石器類 (Fig. 12)

番号	出土位置	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版番号
①	軽石混り黒褐色粘質土	打製石斧	12.2	4.5	1.5	105.61		P.L. 17-1
②	S J 20覆土	磨製石斧	11.1	5.3	2.6	277.0	刃部・基部を欠損	17-2
③	軽石混り黒褐色粘質土	打製石鏃	2.9	2.2	4.0	1.47	黒曜石製	17-4

Table 3 S J 16出土遺物 (Fig. 13)

番号	出土位置	種類	法量 (cm)			胎土		焼成	色調	成形・調整等	図版番号
			口径	底径	高さ	素地	夾雑物				
①	カマド周辺	杯	11.3	—	3.7	やや密	砂粒を含む	やや軟質	赤褐色	口辺ヨコナデ、底部内面ナデ、外面手持ちへら削り。底部内面に焼成後「×」のへら記号あり。完形。	P.L. 17-5
②	カマド周辺	杯	10.4	—	3.4	やや密	砂粒を含む	やや軟質	赤褐色	口辺ヨコナデ、底部内面ヨコナデ、外面手持ちへら削り。完形。	17-6



①

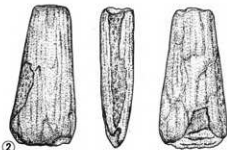
③



①



②



②

Fig. 12 第27次調査区出土石器類 縮尺1/3

Fig. 13 S J 16出土遺物 縮尺1/4

出土した。それ以外にはカマド内部から土師器小片が数点出土したのみで、遺物の残存は少ない。また覆土に含まれる遺物も僅かである。S J 17では、カマド焚口の芯材として土師器長カメが2個使われており、またカマド内部からも土師器片が多数出土しているが、器形を復元することは困難である。床面の南側壁近くには土師器の小型壺の破片が散在しており、北側壁近くからは土師器小片とともに鉄製鎌1点が出土している。S J 24の貼り床下からは、縄文時代中期の土器小

Table. 4 S J 17出土遺物 (Fig. 14)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 等	図版番号
			口 径	底 径	高 さ	素 地	夾 雑 物			
①	覆 土	坏	(10.8)	(6.8)	3.4	やや粗	黒色・灰色 灰物を含む。	硬 質 灰白色	口ノコ水掻き成形後、底部ヘラ おこし。ㄥ程度残存。	PL. 17-7
②	覆 土	坏	(10.2)	—	4.0	やや粗	砂粒を多く 含む。	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、内面ユビナデ、口 辺ヨコナデ、外部横方向手持ち ヘラ削り。小破片。	
③	覆 土	坏	(17.0)	—	(6.0)	やや粗	砂粒を多く 含む。	やや軟質 黄褐色	輪積成形後、内面ユビナデ、口 辺ヨコナデ、外部横方向手持ち ヘラ削り。ㄥ程度残存。	
④	床 面、 南側壁 付近	小型壺	(14.4)	(6.4)	(10.9)	やや粗	砂粒を含 む。	やや軟質 黄褐色	輪積成形後、内面ナデ、口辺ヨ コナデ、外部上部は横位、下部 は縦位のヘラ削り。底部に木葉 痕を残す。ㄥ程度残存。	17-9
⑤	カマド 芯材	長 壺	21.8	—	35.4	やや粗	砂 粒 を 含 む。	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、内面ヘラナデ、口 辺ヨコナデ、外面ヘラ削り。は ぼ完存。	

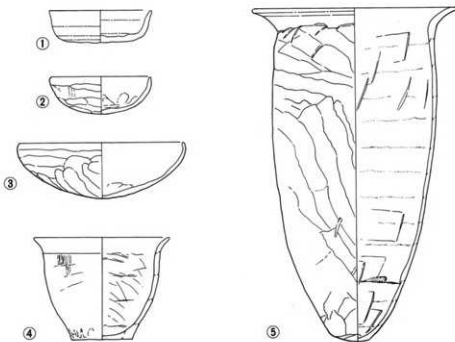


Fig. 14 S J 17出土遺物 縮尺1/4

片とともに土師器杯の写大の破片が出土している。床面上には土師器の破片と礫が散在しており、覆土中には土師器と須恵器の小片が少量含まれているが、全体に遺物の量は少ない。S 70・W 40にあるS J 18では、カマド内および覆土中から僅かに土師器小片の出土をみたのみで、床面上には土師器杯の破片1点以外には、遺物の散布はみられない。S 65・W 46にある不整形土壘 S K 56の底部には、小児頭大の礫とともに丸瓦の写大の破片、平瓦の大型の破片が散在している。S 75～82・W 36～44のS J 19・23、S K 67では、S J 23の床面上およびカマド周辺に多量の大型瓦片が散布しており、また平瓦のほぼ完形品が立った状態であるのが検出された。この北側に接してあるS K 67の内部にも多量の大型瓦片が入っている。この付近に工作場が設けられた状況がみられるところから、これらは構築材ないしは補修用材であったものと考えられる。

南辺築垣を切って造られたS J 21では、埋め戻されたと思われる北カマド内部に完形品を含む

Table 5 S J 24出土遺物 (Fig. 15)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形・調 整 等	図版 番号
			口 径	底 径	高 さ	素 地	夾 雑 物				
①	貼床中	杯	(10.4)	—	—	やや粗	黒色鉱物を含む。	やや硬質	淡赤褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラ削り。底部と胴部、口辺の写を欠く。	
②	覆土	杯	13.8	—	4.0	やや密	砂粒を含む。	やや軟質	深赤褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラ削り。完形。	PL. 17-8
③	覆土	杯	9.6	—	3.3	やや粗	砂粒を含む。	やや軟質	淡赤褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラ削り。完形。	
④	覆土	杯	16.0	—	—	粗	砂粒を多く含む。	軟 質	暗褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラ削り。口辺小破片。	
⑤	覆土	小形壘	13.8	—	—	粗	砂粒を多く含む。	軟 質	暗褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。口辺小破片。	

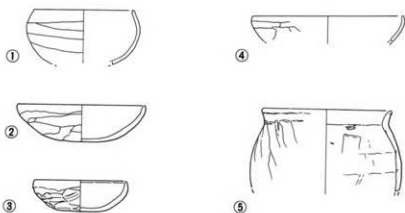


Fig. 15 SJ 24出土遺物 縮尺1/4

多数の环、カメの破片があったことが注目される。後出の東カマドからは構築材である大型の瓦片とともに、少量であるが土師器カメ片が出土している。南半部の床面近くには土師器环・カメ片が散布している。東カマド南側の築垣基部残部上面には、凹面に「大」を刻書する平瓦の完形品が凹面を上にして置かれていた。S J 21の西に接してあり、同じく南辺築垣を切って造られたS J 22では、カマド付近に完形品を含む环が多数あり、その手前の床面上に羽釜の破片が散布し

Table 6 S J 21出土遺物 (Fig. 16)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 等	図版 番号
			口 径	底 径	高 さ	素 地	夾 雑 物			
①	北カマド内	环	14.2	6.9	5.1	やや粗	白色鉱物を含む。	やや軟質 黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切。付高台。口辺刃を欠く。	
②	北カマド内	环	(15.2)	(6.2)	(4.8)	粗	石英を僅かに含む。	軟 質 灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切。未調整。1/2程度残存。	P.L. 18-1
③	床面、南側壁付近	环	(15.7)	(7.2)	(4.6)	粗	石英大粒などを多く含む。	軟 質 赤褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。1/2程度残存。	18-2
④	北カマド内	皿	8.3	4.8	1.7	粗	砂粒を含む。	軟 質 黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切。未調整。底部外面より内面にまでは貫通しない割突あり。口辺を僅かに欠く。	18-5
⑤	北カマド内	环	(13.4)	(8.2)	(5.9)	粗	砂粒を含む。	軟 質 灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切。未調整。1/2程度残存。	18-3
⑥	北カマド内	甕	(27.2)	—	—	粗	白色・黒色鉱物を含む。	やや軟質 褐色	輪積成形後、口辺ロコナデ、外面下半ミガキ、内面ナデ。1/2程度残存。	18-4

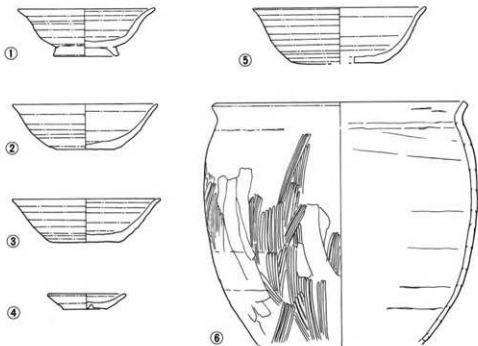


Fig. 16 SJ 21出土遺物 縮尺1/4

ていた。西側壁近くの床面上には土師器環の完形品、須恵器カメの底部片があり、北側壁近くには土師器環の完形品があった。寺域南側のS J 20では、南側壁近くの床面上から土師質の環の完形品とともに磨製石斧1点が出土した。南側溝S D 01の南岸の立ち上がり部には、丸瓦の大形片、角閃石安山岩の切石などが置かれるようになっていた。

第27次調査区からは、遺構に伴う遺物以外に、掘乱層の中からも土器類、瓦片などが出土して

Table 7 S J 22出土遺物 (Fig. 17)

番号	出土位置	種 類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 等	図版 番号
			口 径	底 径	高 さ	素 地	夾 雜 物			
①	カマド付近	環	9.9	5.6	3.6	粗	石英・雲母 細粒を多く 含む。	やや軟質 灰褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切。 未調整。外面底部近くより内面 に貫通するへら状のものによる 割突あり。完形。	
②	カマド付近	環	10.0	4.0	3.1	粗	白色鉱物等 を含む。	やや軟質 暗黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切。 未調整。口辺りを欠く。	P.L. 18-6
③	床 面	環	11.1	5.6	4.1	粗	石英、黒色 鉱物細粒を 多く含む。	軟 質 灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切。 未調整。内・外面とも体部下 半は黒色。完形。	18-7
④	床面直上	皿	11.4	5.4	2.5	粗	石英、黒色 鉱物細粒を 多く含む。	軟 質 灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切。 未調整。完形。	
⑤	カマド付近	環	10.7	6.4	4.4	粗	石英・雲母 細粒を含む。	やや軟質 赤褐色	右回転ロクロ成形後、内・外面 ともヨコナデ。底部余切後、ス リ消す。付高台。	18-8
⑥	カマド付近	羽釜	(24.2)	—	—	やや粗	石英・雲母 等を含む。	やや軟質 黒褐色	輪積成形後、外面上半ロクロ、 口辺ヨコナデ、下半へら削り、 内面ナデ。小破片。数片を接合 して復元。	

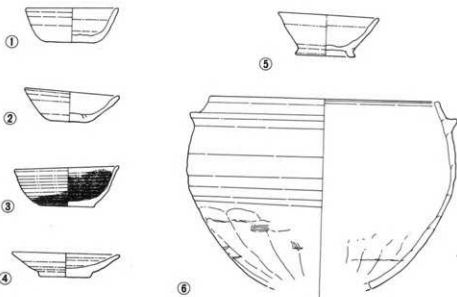


Fig. 17 S J 22出土遺物 縮尺1/4

いる。また南辺築垣の南縁部を掘り込んで造られた土壇（SK60）の埋土中からは、瓦片とともに内耳塙型土器、永楽通宝、人骨とみられる骨片などが出土している。またSD01底部の焼土壇（SK62）の底部には黒色灰が堆積しており、その中に少量であるが焼けた骨片と名称不明の銅銭が混っていたことから、ここで火葬の行なわれたことが推定される。

Table 8 第27次調査区出土遺物 (Fig.18)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土	焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 等	図版番号
			口 径	底 径	高 び				
①	S J 249近	杯	(10.6)	—	(3.9)	粗 砂粒を含む。	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、体部内面へラナデ、外面へラ削り。互程度残存。	P L、 19-6
②	S J 18土	蓋	7.6	胴部径 9.3	(6.4)	密 砂粒を含む。	やや軟質 赤褐色 は一部 灰色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、体部内面ヨコナデ、外面へラ削り。互程度残存。	19-7
③	S J 18 床面直上	蓋	—	(6.4)	(1.7)	やや粗 黒色鉱物細粒を多く含む。	硬 質 灰色	ロクロ水焼き成形。頂部回転へラ削り。互程度残存。積みはなし。	
④	S J 18土	杯	(10.3)	—	(3.8)	やや密 褐色・黒色 鉱物を含む。	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、体部内面ヨコナデ、外面へラ削り。口辺小破片。	
⑤	S J 249近	杯	(11.3)	(7.6)	(3.9)	粗 黒色鉱物を含む。	硬 質 灰色	ロクロ水焼き成形後、底部回転へラ削り。互程度残存。	19-B
⑥	S J 179近	蓋	(18.0)	—	—	やや粗 白色鉱物を僅かに含む。	硬 質 灰白色	ロクロ水焼き成形後、頂部回転へラ削り。横みを貼付。口辺小破片。	
⑦	S J 179近	杯	(17.0)	(12.0)	(4.0)	密 黒色鉱物をまばらに含む。	硬 質 灰色	右回転ロクロ成形後、底部回転へラ削り。高台を貼付。互程度残存。	
⑧	SK60	内耳塙	(27.8)	—	15.3	粗 砂粒を含む。	やや軟質 内外面 を焼き 黒色。 底部及 び断面 灰色。	輪積成形後、底部へラ削り。内耳は2か所か。口辺を除きほぼ完成。	19-9

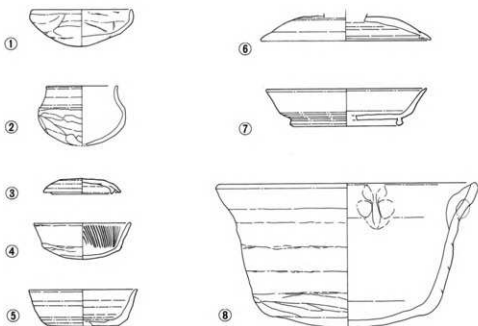


Fig. 18 第27次調査区出土遺物 縮尺1/4

4. 第28次調査

(1) 遺跡

寺域の中央部を南北に貫くように「参道」と通称される溝状の掘り込みがあるが、これは寺域南側では切り通し状となって染谷川北岸に至っている。寺域内については第10トレンチ・第11トレンチ（昭和55年度）、第12トレンチ拡張（昭和58年度）の各調査で、その状況の確認を行なった。それによると溝（S D02）は、塔跡東側の第11トレンチでは現地表下約2mまで掘り込まれており、底部から五輪塔の空風輪、地輪、馬骨とみられる獣骨片が出土している。また埋土中には、浅間B軽石層の形成は認められない。この状況は金堂の南方の第10トレンチでも同様であった。第12トレンチ拡張では、この溝の東岸～底部とみられる掘り込みを検出した。底部には拳大～小児頭大の礫が多数あるものの、土器などの出土はみられなかった。また底部が北に向かって高くなっていくことから、この溝の北端に近い部分であると判断された。さらにこの溝は、金堂基壇の西縁部を切り取り、南大門の中央～西半部を破壊して造られていることが確認されている。以上の所見から、S D02はその性格は不明であるが、国分寺存続期のものとは考えられず、その廃絶後に設けられたものと判断された。

寺域内についてはこのような所見を得たが、寺域外については南側約2kmにある古代の幹線道路（東山駅路）から国分寺の正面である南大門に至る道路を想定した場合、段差のある染谷川の渡河をどのようにしたかが問題となる。これを川面に近い位置で行なった場合、北岸から南大門に至る間を緩い傾斜とするために切り通し状の「参道」を造っていた可能性が考えられることから、その南大門外側の部分についての状況の確認を行なった。

南大門跡の南側10mに設定した北トレンチでは、標高123.78mの位置まで掘り下げられた状況があり、この上面の地山の砂質土の2次堆積である灰褐色粘質土および砂混暗褐色粘質土中には瓦小片、獣骨片が含まれている。その上部には黄褐色土小塊を含む暗褐色土があり、その上部は耕作土となる。その10m南側の中トレンチでは、同様に全体が淡褐色砂質土の地山まで掘られた状態であったが、東端のE26では標高124.92mで、西に向かって緩かに下がってE24で124.60mとなり、平坦部を形成した後さらに段差を設けて下がり、E22で124.04m、さらに一段下がってE21では123.62mとなる。この高さで平坦面が造られているが、その中央に上部幅60cm、底部幅30cm、深さ12cm前後の小溝がある。この内部はザラザラした砂質土であり、瓦片・小礫を含み流水のあった状況を示している。上部の堆積は北トレンチと同じであるが、獣骨の量は少ない。その10m南側の南トレンチでは、地山はより急な傾斜で掘られており、E21では122.94mとなる。堆積の状況は基本的には北トレンチと同様であるが、獣骨片はほとんどみられない。

以上の検出状況から、寺域外の部分は4～5段の階段状に掘られた南に向かって低くなる溝であり、その中央部では流水のあった様子が確認された。また遺物と堆積土層の状況から、国分寺存続期の溝とは考えられず、その廃絶後に設けられたものと判断された。国分寺南大門に至る参道については、後世の改変が著しく、これを示す遺構を確認することはできなかった。

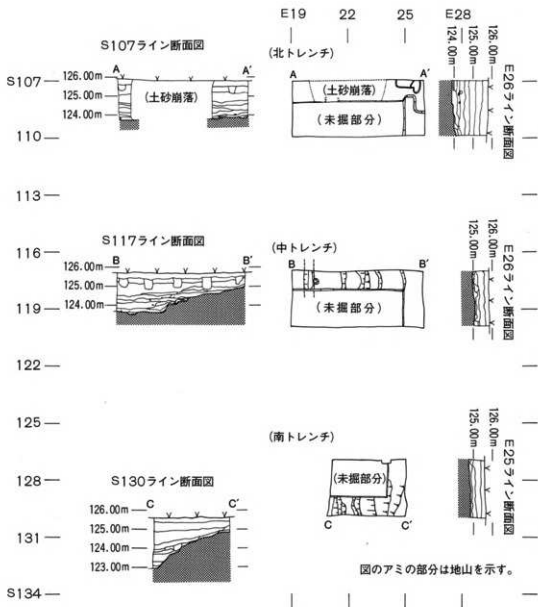


Fig.19 第28次調査区全体図 1/200

(2) 遺物

底部に造られた南北方向の小溝の埋土および上部の堆積土から少量の瓦片が出土しているが、いずれも小片であり、遺構の性格および時期を示す特長は認められない。ただこの位置では石造物の顕著なものも出土せず、獣骨は南に進むに従って出土量が少なくなるという所見を得た。

5. 第29次調査

(1) 遺構

寺域のほぼ中央に遺存する金堂跡は、基壇と礎石8個が残るが、昭和59年度の第25次調査でその規模と構築状況について一定の所見を得ることができた。それによると金堂は桁行7間・梁間4間で、柱間は桁行が330—330—360—360—360—330—330cm、梁間が330—345—345—330cmであり、方位はN—2°30'—Wを示す。基壇は、高さは110cm前後(3.5尺前後)、基壇の出は南面での計測により330cm(11尺)と推定され、周縁は凝灰岩切石による化粧であったとみられる。基壇南縁の位置はE17でN14.9となる。この付近での標高をみると、旧表土面は128.65m、基壇残部上面129.10m、礎石上面が129.85mを示す。金堂跡は、本尊の背面にあたる部分に米迎壁の地覆とみられる石列が遺存していた以外は、後世の改変が著しい。基壇の周辺は主に耕作による削平が進み、内部は墓墳による攪乱が著しく、特に南縁部にそれが目立った。

今回の調査は、この金堂の南側一帯で行なった。この部分は畑地となっており、北は金堂、東は農道に限られ、南は段差となり約80cm低い位置にある農道によって、西は寺域中央部を貫通する溝状掘込みによる段差によって限られるテラス状を呈している。地表面はほぼ水平で、標高128.60—128.70mにある。ここで中門の確認、金堂南側の参道等の遺構の確認、および後世の墓墳の分布の状況の確認を目的として調査を実施した。

調査の結果、この部分全体が黄色粘質土(ローム)の地山まで攪乱をうけており、旧表土層および遺物包含層は残存していないことが明らかとなった。E28ラインで地山の標高をみると、N13で128.50m、N Oで128.35m、S10で128.30m、S20で128.25m、S30で128.00m、S35で127.60mとなり、南に向かうに従って次第に低くなっている。南大門の礎石上面が127.70—127.75mであることからすると、国分寺存続期の地形も金堂から南に向かって次第に低くなっていたことがわかる。現表土は、金堂近くのN13で厚さ約20cmあり、調査区南端のS35では約70cmとなっているが、S20以南では比較的新しい盛土であり、地形を水平に均す作業が行なわれたことが知られる。この全体に耕作によるとみられる溝が検出されたが、特にS20以南では150cm間隔で幅60cm、深さ30cm前後の「L」型溝が東西に走り、さらに270cm間隔で浅い溝が南北方向に走っており、遺構の損壊を著しいものとしている。

中門の位置については、昭和58年度の第22次調査で今回の調査区の南側S39—59の範囲で検出を試みたが、この部分では古墳時代後期の竪穴式住居などが検出されたのみで、中門に関係するとみられる遺構は確認されなかった。従って中門の想定される位置としては、今回の調査区の南端部のS30—36付近が可能性が高いと判断された。また太田静六・添田正一「上野国分寺伽藍の研究」(『建築学会論文集』第27号 昭和17年)には、中門について「金堂陸の南砌の南方約180尺を隔てた所に、道路に沿って1個の礎石が埋没しているが、この他にも(ワ・カ・ヨ)の3個が最近迄8尺程の間隔を保ち乍ら規則正しく並んでいたことは古老のよく知る所である。」との記述があり、全体図の金堂南方の道路の北側に礎石4ヶ所の位置が示してあるが、これは前記の

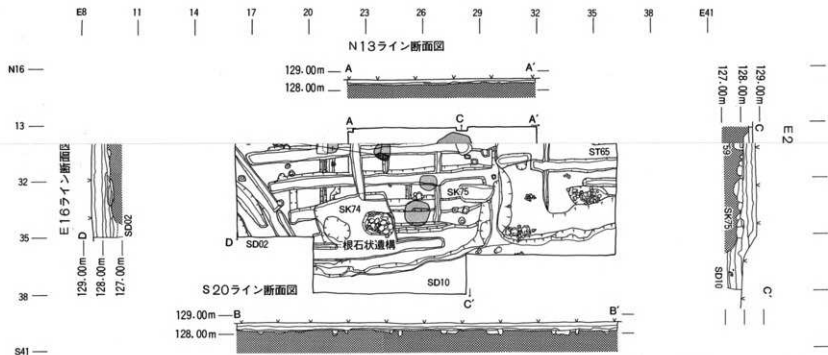


Fig. 20 第29次調査区全体図 1/200

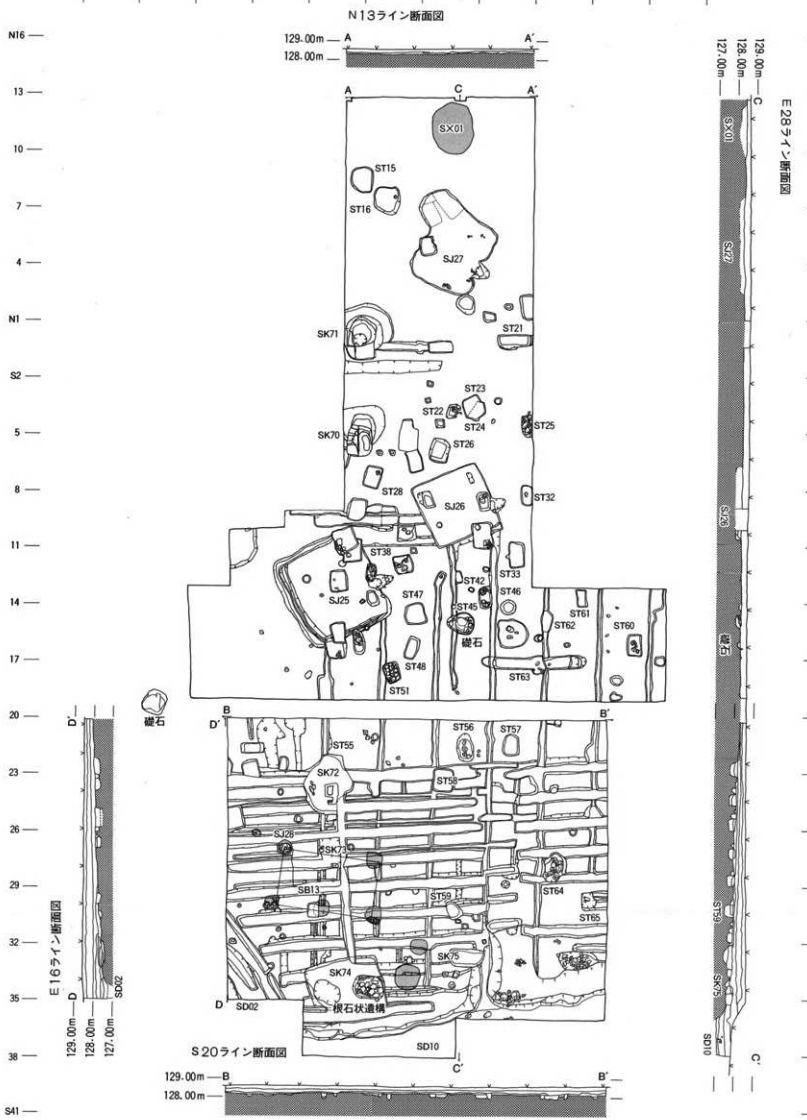


Fig. 20 第29次調査区全体図 1/200

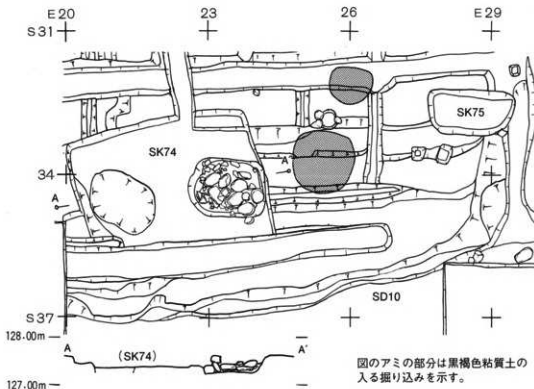


Fig.21 根石状遺構周辺 1/80

想定的位置にはほぼ一致する。発掘調査の結果では、中門跡と確定できる遺構は検出されず、また太田論文にある礎石についても確認をすることができなかった。ただS34.3・E23.5で、黄色粘質土を140×110cmの楕円形で深さ約40cmの皿状に掘り込み、内部に径30cm大の扁平な玉石を並べた礎石の根石状遺構が1個所検出された。検出面は標高127.60m付近である。この底部には瓦片が一層に敷かれた状態であり、この上に玉石が一段で並べられたようであって、さらにその上にも数個の玉石がのった状態である。玉石の間隙には黄褐色土混り暗褐色土が入っているが、土器類の混入はみられない。この位置は太田論文で古老の伝える礎石のあった場所とほぼ一致しており、中門の礎石の根石である可能性は高い。この周辺ではこれ以外に同様の遺構の存在は確認できないが、この西側やや南寄り約240cmのS34.6・E21.1を中心とした位置に140×120cmの不整楕円形で地山を皿状に掘り込んだ窪地が検出されており、根石抜き取り痕である可能性がある。根石状遺構の東側やや北寄り約220cmのS33.7・E25.6を中心とした位置に径約130cmの円形の掘り込みがあり、この内部には黒褐色粘質土が入った状態であったが、玉石などは検出できず、礎石の掘形であるとは確認できなかった。根石状遺構の西側約600cmは、SD10に向かって落ちる南北方向の小溝がラッパ状に開いた形状を見せているが、この付近の地山上面および表土下層には扁平な円礫とともに、鋭い稜をもった硬質の角閃石安山岩の破砕片が多量にあった。これは、恐らく礎石状の石が割られたものとみられる。これらの検出状況から、この付近に中門の存在した

可能性は大きいものの、その正確な位置・規模・構造について詳しくすることはできなかった。根石状遺構の南約180cmから南は、第22次調査で確認されている東西方向の溝（SD10）があり、これらの遺構が中門の北側柱列であった場合には、南側柱列は完全に破壊されていることになる。この溝はS35・E20からS32・E16にかけて斜向した形状を示しているが、これは寺域中央部を貫通する溝状掘り込み（SD02）に取り付く部分がラッパ状に開いているためであろう。

SB13 金堂の南南西55mのS25~30・E18~24で掘立柱建物1棟が検出された。検出面は黄色粘質土面で標高は127.70m付近にあるが、耕作溝による攪乱のため遺存状況はよくない。2×1間の東西棟で、総長は510×300cmを測る。柱間は桁行が255cmの等間、梁間は300cmである。方位はE-3°-S(N-3°-E)を示す。柱穴掘形は80×70cm前後の不整形を呈し、深さは10~30cmとばらつきがある。埋土は黄褐色土混り黒褐色粘質土でしまっている。柱痕は不明である。掘形には重複、建て替えの状況は認められない。北側柱列の中間の柱穴は後世の方形土塋（SK73）によって破壊されている。時期を明確に示す手懸りはないが、掘形の形状からみて、奈良時代のものである可能性がある。

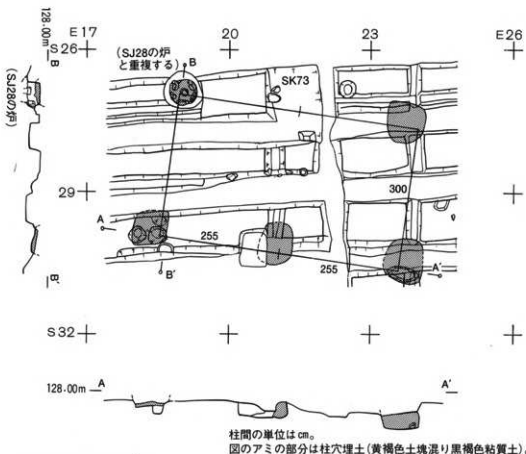


Fig. 22 SB13 1/80

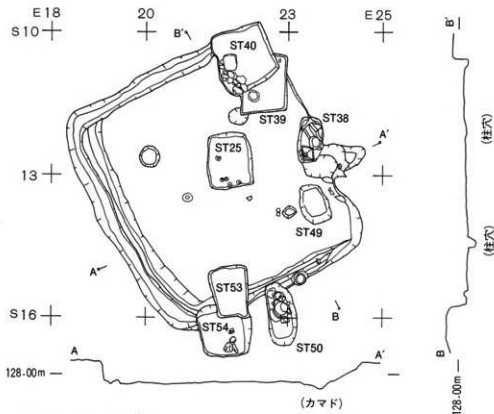


Fig. 23 SJ 25 1/80

S J 25 金堂基壇南縁の南側約28mのS 10-16・E 18-23にあり、黄色粘質土面で検出された。規模は525×470cmで南北に長い長方形を呈し、深さは現状で約50cmを測る。方位はE-33°-Nを示す。東側壁の中央部やや南寄りに地山を半円形に素掘りしたカマドが設けられており、焚口の袖は自然石を立てて造られている。壁の立ち上がりはやや緩い傾斜である。床面は黄色粘質土中に造られており、平坦で固くしまっている。柱穴は、現状で3個が確認されているが、上部径30-40cmの円形で、深さは15cm前後である。柱間は南北が230cm、東西が200cmを測る。貯蔵穴は確認されない。壁下には幅12-20cm、深さ4-10cmの溝があるが、西側ではこれが2列並行した状態である。覆土は、床面直上には黄色土混り暗褐色土がしまった状態でうすく堆積しており、その上部は黄色土小塊を斑点状に含む黒褐色土を主体とする。これらには少量の土師器の小片が混じっているが、瓦の混入は認められない。カマド内および周辺から出土した土器により、この住居の時期は7世紀末から8世紀初頭と判断される。カマドの北半部、住居の北東隅部、中央部、それに南側壁の西半部は後世の墓塚によって切られた状態である。

S J 26 S J 25の東北東4mのS 6-10・E 25-30にあり、黄色粘質土面で検出された。規模は362×346cmで僅かに東西に長い長方形を呈し、深さは現状で30cm前後を測る。方位はE-30°-Nを示す。東側壁の南寄りに地山を半楕円形に素掘りしたカマドが設けられており、焚口の袖には砂岩切石を使っていたとみられる。壁の立ち上がりは急である。床面は黄褐色粘質土中に造られ

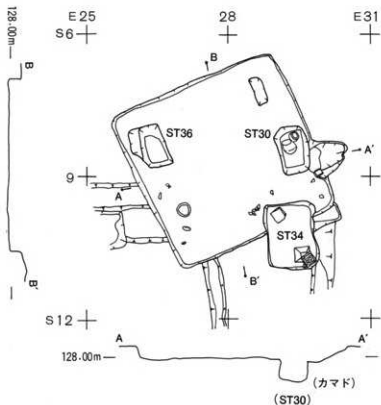


Fig. 24 SJ 26 1/80

ており、中央部が僅かに高くなる形状を示し、固くしまっている。柱穴、貯蔵穴および壁下の溝は検出されないが、南東隅近くの床面上に径30cm大の扁平な玉石が1個据えられた状態であった。覆土は、床面直上に黄褐色土と黒褐色土との混合した層がうすくしまった状態であり、その上部は黄褐色土混り暗褐色土を主体とする。カマドの一部、南側壁の一部などが後世の墓塚によって破損している。床面上から出土した土器から、この住居の時期は7世紀末であると判断される。S J 27 金堂基壇南縁から南へ約8mのN 2~7・E 25~30にあり、黄褐色粘質土面で検出された。規模は400×345cmで南北に長い不整形長方形を呈し、深さは現状で約20cmと浅い。方位はE—62°—Sを示す。東側壁中央部に地山を半円形に浅く素掘りしたカマドが設けられており、焚口は壁の内側に地山を土手状に削り出して造っている。壁の立ち上がりは急である。床面は黄褐色粘質土中に造られており、平坦でしまっている。柱穴、貯蔵穴、壁下の溝は検出されない。覆土は床面直上に黄褐色土混り暗褐色粘質土がうすくしまった状態で堆積しており、その上部は軽石混り暗褐色粘質土となる。カマド周辺および床面上に土師器杯、カメの小片が散布する。これらの出土遺物から、この住居の時期は7世紀末から8世紀初頭と判断される。全体に削平が進んでおり、また西側壁の一部と北西隅部は後世の墓塚により破損している。

これらのS J 25・26・27は、その時期が7世紀末から8世紀初頭であることから、国分寺創建以前にこの付近にあった集落の一部であるとみられる。

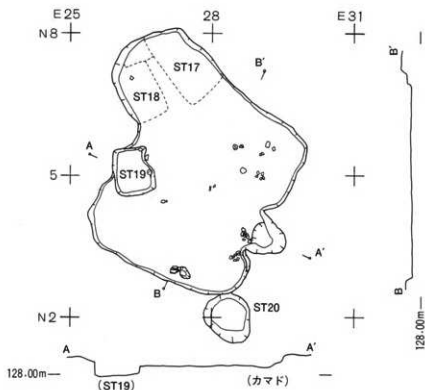


Fig. 25 S J 27 1/80

S J 28 S 27・E 19でS B 13の北西隅柱穴の断ち割りを行なったところ、その下部から自然石を円形に並べた炉址が検出された。地山の黄色粘質土を径60cm前後の円形に掘り下げ、その内側壁に沿って20cm大の自然石を5個立て並べているが、北側が僅かに開口した形状となっている。この石の上面の標高は127.74mにある。その中央に膝坂式の特徴を示す小型カメを正立させて据えるが、その下半部は褐色土で埋められるようにしてあり、埋土の上面は焼けた状態を示している。周辺にはこれに伴うとみられる円形の小柱穴が数個検出されているが、S B 13および後世の土壌による攪乱、耕作溝により削平が著しいため、住居の規模や構造は明らかでない。また埋設されているカメ以外には、これに伴う遺物の出土は確認されていない。土器の型式から、この住居は縄文時代中期に属するものとみられる。第27次調査区など寺城南半部分の調査では、盛土に使われている軽石混り黒色粘質土の中から縄文時代中期に属する土器片などが出土しているが、遺構として確認されたのはこれが初例である。

S K 70 S 3～6・E 22～24の黄褐色粘質土面で検出された素掘りの土塊。上面が260×200cmの南北に長い不整形長方形で、南端はやや狭くなる形状を示す。深さは現状で約170cmを測る。掘形は上半部は垂直に近く、下半部は急傾斜で掘られている。底部は地山の黄褐色砂土中に造られており、150×90cm大であるが、南半部はさらに約50cm深くなっている。南西隅から北に向かって下がる形で、粘質土の盛土による3段（現状）の階段が造られている。埋土は地山の黄褐色土塊を

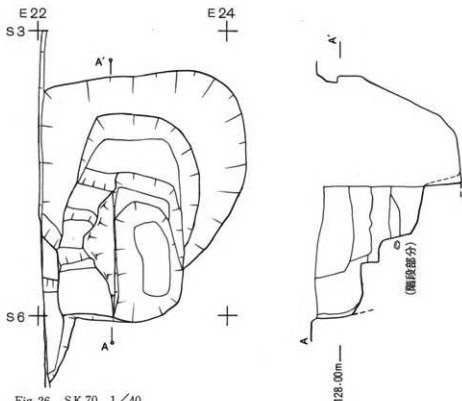


Fig. 26 SK 70 1/40

含む黒褐色土を主体とする。埋土の中心には少量の瓦片と名称不明の銅銭が含まれ、また最上層には五輪塔の部分などが混じっている。時期は中世以降のものと思われるが詳かでなく、また用途についても不明である。

SK 71 SK 70の北側約3mのN 2～S 1・E 22～24にあり、黄褐色粘質土面で検出された素掘りの土壌。上面は径約270cmの不整形円形を呈し、北・東・西には幅約40cmで浅く掘り込まれたテラス状の部分がつく。深さは190cm（現状）を測るが、南側約60cm分には底面より60cm高い中段が造られている。掘形は急角度であるが、南側のみは垂直である。底部は地山の灰色砂土中に造られており、100×95cmの不整形形で、中央部が僅かに低くなっている。南側の中段部分には1単元6～20cmで灰色砂土塊混り黒褐色土と黄褐色土塊混り黒褐色土とをよくしまった版築様に積み上げており、これを垂直に切るように新たな掘形がつけられている。埋土は黄褐色土塊混り黒褐色土を主体とし、しまっている。遺物は埋土中から器種不明の土師器小片が出土したのみである。SK 70と同種のものと思われるが、時期、用途については不明である。これと同種の土壌は、金堂西側の第26次調査で2基（SK 32・37）が検出されている。

墓壇（ST 15-65） N 9～S 30の間に墓壇が51基検出された。いずれも南北に長い長方形を呈し規模は130×120cm大のものが多く、75×50cm大のものが数基混じる。検出面からの深さは20～80cmで一定していない。掘形はほぼ垂直である。内部には五輪塔の空風輪、火輪、水輪、磔などが乱雑に投棄された状態で入っており、ST 15などには多数つめ込まれるようにしてあった。遺

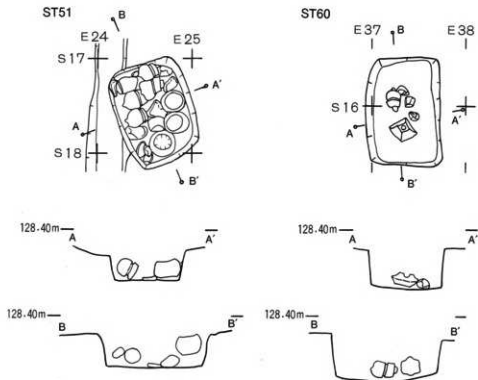


Fig. 27 墓塚 1/40

骸の残存状況は悪く、いずれも一部分を残すのみで、もろく粉末状になっているものもあった。副葬品としては、S T 28・52・54の内部に素焼きの皿があった以外に、銅製の管などがある。またS T 54から出土した角閃石安山岩製の五輪塔の空風輪・火輪・水輪には梵字が陰刻されている。これらの墓塚の年代については、出土した素焼きの皿が手懸りとなるが、まだ詳細な検討を行っていない。周辺から出土した年号を記す石造物から類推すると、14世紀後半以降のものであるとみられ、また重複関係を示すものがあることから数代にわたって営まれたものであることが知られる。墓塚の配置に企画性あるいは群の形成といった状況は、特に認められない。

これらの遺構以外に、N 11・E 28付近で黄褐色粘質土の地山を皿状に浅く掘り込み、その内部に軽石混り黒褐色粘質土がよくしまった状態で堆積している性格不明の遺構（S X 01）が検出された。この埋土中には大型の瓦片などが少量含まれている。またS 15・E 28.5で地山を掘り込んだ穴の中に、火輪・礎などとともに80×70cm大の硬質の角閃石安山岩の自然石が埋められた状態であるのが検出された。大きさや形状とから、門の礎石である可能性があり、原位置から運び出されたものとみられる。さらにS 19.3・E 12.2で、水路の東岸にその一部が見えていた礎石の全容を確認したが、硬質の角閃石安山岩の自然石で、140×130cm大で上面は平坦であり、大きさや形状とから金堂の礎石である可能性が強く、それが運び出されて地中に埋め込まれたものとみられる。

(2) 遺物

表土の耕作土中には、瓦小片・土器小片・小礫などが少量含まれるが、その下部は直ちに地山となり、遺物包含層の形成はみられない。また瓦溜りような遺物が集中してある遺構は検出されず、出土遺物の大部分は竪穴式住居と墓塚からのものであり、石造物と礎石の破砕片を除くとその量は少ない。

S J 25からは、カマドの焚口内部から土師器杯の完形品が1点出土した以外は、カマド周辺と床面上から少量の土師器杯の破片が出土したのみである。覆土中の遺物の量は少ない。S J 25に直接伴うものか疑問はあるが、南側壁中央部で、土師器カメが1点正立して据えられるようにしてあるのが検出された。口縁部を欠失しているが、遺存状況は良好で、体部外面には倒立した状態で「戸下」と墨書されている。

S J 26では、東側壁近くの床面上に須恵器杯、土師器杯の小片が少量散布しているのが認められたのみで、遺物の量は少なく器種も杯に限られる。覆土中にも遺物の包含はほとんどみられない。S J 27でも同様であり、器形の復元に耐えるものはみられない状態である。

Table. 9 S J 25出土遺物 (Fig.18)

番号	出土位置	種別	量 (cm)		動土	出土	構成	色調	成形・調整等	図版番号	
			口径	底径							高さ
①	覆土	杯	(9.7)	—	(5.5)	やや密	砂粒を含む	やや軟質	赤褐色	輪埴成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面へツ磨り。瓦積敷存在。	P.L. 20-1
②	覆土	杯	(11.0)	—	(4.8)	やや密	砂粒を含む	やや軟質	赤褐色	輪埴成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面へツ磨り。瓦積敷存在。	P.L. 20-1
③	カマド内	杯	10.6	—	3.1	やや密	砂粒を含む	やや軟質	赤褐色	輪埴成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面へツ磨り。完形。	20-2
④	覆土	杯	(11.5)	—	(3.5)	やや粗	砂粒を多く含む	やや硬質	赤褐色	輪埴成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面へツ磨り。全体に丹念にミガキを行い、内面には放射状線文あり。小破片。	20-2
⑤	南側壁面	壺	(23.4)	4.7	(30.0)	粗	砂粒を多く含む	やや軟質	赤褐色	輪埴成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面へツ磨り。体部外面に倒立した状態で「戸下」の墨書あり。口辺の大半を欠く。	20-3

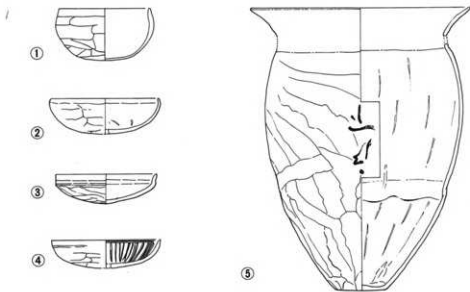


Fig. 28 S J 25出土遺物 縮尺1/4

第29次調査で、表土層中から奈良三彩片が1点採集された。大きき8×6cm、厚さ8～9mmで、形状から壺の胴部であると推定される。胎土は密で夾雑物はほとんど含まれず、焼成は硬くしまっている。外面には全面に緑色の釉薬がかかり、部分的に褐色の釉薬が上から下に向かって流れる形状でかかっている。内面にはロクロ痕が残り、全面にうすい緑色の釉がかかっている。形状と施釉の状態から、この破片は塔跡周辺の調査で出土した葉壺の部分と同一個体であるとみられる。

Table.10 S J 26出土遺物 (Fig. 29)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 等	図版番号
			口 径	底 径	高 さ	基 地	夾 雑 物			
①	床 面	環	(8.8)	—	3.2	やや粗	黒色鉱物を含む。	硬 質 灰 色	ロクロ水挽き成形後、口辺ヨコナデ、内面ナデ、外面回転ヘラ削り。5程度残存。	
②	床 面	環	(11.8)	—	(2.2)	やや密	砂粒を含む。	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、内面放射状ミガキ、外面手持ちヘラ削り。口辺小破片。	
③	床 面	環	(17.0)	—	5.8	やや粗	砂粒を含む。	やや軟質 黄褐色	輪積成形後、口辺ヨコナデ、内面ミガキ、外面手持ちヘラ削り。小破片。	P.L. 20-4

Table.11 奈良三彩陶 (Fig. 30)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 等	図版番号
			口 径	底 径	高 さ	基 地	夾 雑 物			
	第29次表土層跡周辺	奈良三彩 (葉壺)	(12.2)			密	殆ど含まない。	やや硬質 胎土は黄白色	ロクロ水挽き成形後、付高台。体部内面全面と底部外面には淡黄緑色、体部外面には緑色、褐色の釉がかかる。残存部分では白色の部分が少ない。小破片6片より復元実測。「概要3」で既に紹介済みだが、今年度新たに発見された破片が、以前のもとの接合したので、改めて提示する。	P.L. 20-6

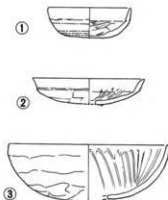


Fig. 29 S J 26出土遺物 縮尺1/4

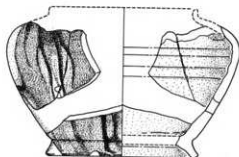


Fig. 30 奈良三彩陶 縮尺1/3

また最近、塔跡の北側で表採された奈良三彩の破片1点がこの薬壺の胴部と接合した。これを含めた推定復元の実測図を掲げておく。

第29次調査ではこれら以外に、S J 28の炉内から縄文時代・勝坂式の小型カメの完形品、墓壇内から素焼きの皿の完形品が出土しており、特にS T 52から皿が5点出土しているのが注目される。また、墓壇および調査区南端部の東西溝の周辺から多数の五輪塔の部分などが出土している。その数を種別に示すと、空風輪57個、火輪11個、水輪16個、地輪1個、宝篋印塔笠石4個となる。これらは検出された墓壇に関係するものとみられるが、原位置を保っているものは無く、完形に復元できるものもみられない。五輪塔の中には、梵字を陰刻したものが見られるが、年号を記すものは確認できない。

Table.12 第29次調査区出土遺物 (Fig. 31)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	成 形 ・ 調 整 等	図版 番号
			口 径	底 径	高 さ					
①	S J 28 (埋壺印)	縄文土器 (勝坂末)	15.0	8.6	23.6	粗	石英・雲母 等を多く含 む。	やや軟質 赤褐色	埋壺印の敷設器として出土。 輪積成形後全体を撫でて調整 し、上部の装飾を施した後、R -1の縄文を上へ下へ施文して いる。2次焼成を受けてもろく なっているが、ほぼ完形。	P.1. 20-5
②	S T 52	皿	8.5	4.6	2.1	粗	砂粒を多く 含む。	軟 質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切 り。未調整。完形。	
③	S T 52	皿	9.0	4.9	2.2	粗	砂粒を多く 含む。	軟 質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切 り。未調整。底部に木目痕あり。 完形。	
④	S T 52	皿	11.1	6.9	2.7	粗	砂粒を多く 含む。	軟 質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切 り。未調整。完形。	21-1
⑤	S T 52	皿	11.0	6.6	2.5	粗	砂粒を多く 含む。	軟 質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切 り。未調整。完形。	21-2
⑥	S T 52	皿	10.7	7.0	2.8	粗	砂粒を多く 含む。	軟 質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切 り。未調整。完形。	
⑦	S T 28	皿	10.0	6.0	3.1	粗	砂粒を多く 含む。	軟 質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切 り。未調整。完形。	21-3
⑧	S T 16	香炉	13.0	8.6	3.5	粗	砂粒を多く 含む。	軟 質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部に脚 3本を貼付するが、いずれも欠 損して基部のみ残存。環部は完 存。	21-4
⑨	S K 73	皿	12.0	9.0	1.4	粗	砂粒を多く 含む。	やや軟質 赤褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切 り。未調整。口辺を打ち欠き整 えて、底部を中心の皿状に作り 直している。	
⑩	S T 54	五輪塔	(空輪) 上 端 高 最大幅 下 端 12.0 16.0 15.0 — (風輪) (同左) (同左) (火輪) (同左) (同左) 上 端 高 最大幅 下 端 12.5 10.0 7.0 12.5 (水輪) (同左) (同左) (同左) 上 端 高 最大幅 下 端 12.0 19.5 13.5 22.5 (地輪) (同左) (同左) (同左) 上 端 高 最大幅 下 端 17.0 16.0 14.2 23.6	(同左) (同左) (同左) (同左) (同左) (同左) (同左) (同左)	角閃石安山岩製	空・風輪は一体で、火・水輪と は本来は別個体である可能性も ある。空輪には「キヤ」、風輪 には「カ」、火輪には「ラ」、水 輪には「バ」が陰刻され、その 後「キヤ」・「カ」は赤色塗料、 「ラ」・「バ」は黒色塗料で着 色されている。	21- 5.6			

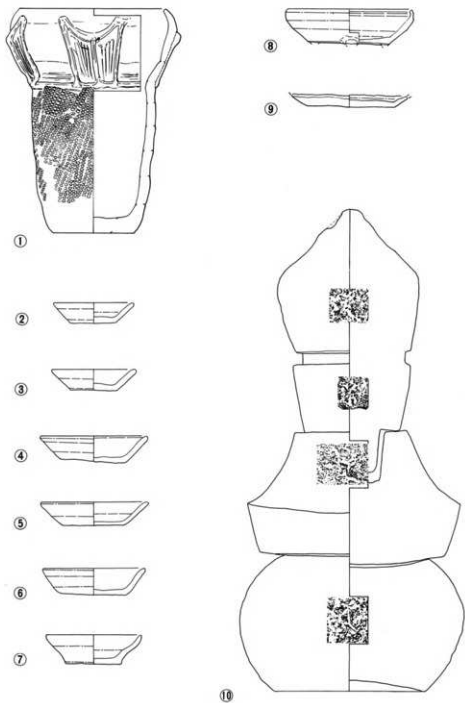


Fig. 31 第29次調査区出土遺物 縮尺1/4

V 文字瓦

これまでの調査で出土した文字瓦は、検索用カードに収録した分で1,523点となり、未収録分を含めると1,600点近くなるものとみられる。その中で押印は193点、押印+ヘラ書きは12点、記号は194点であり、それ以外はヘラ書きである。ヘラ書きの中で3文字以上のものは35点、2文字は89点、1文字が443点で、それ以外は断片であって文字の判読は困難である。

今回の調査では、第27次で47点、第29次で5点の文字瓦が出土した。特定の建造物や瓦溜りなどの遺構に伴うものでなく、いずれも堅穴式住居のカマドに使用された瓦、覆土に包含されるもの、また表土の攪乱層中に含まれるものである。

この中で注目すべきものとしては「武秋足」(Fig. 32—⑤)が掲げられる。この「武」は「政」と一画多く書かれている。南大門内側の浅間B軽石層下に形成されていた瓦溜り出土の平瓦の凸面に「成秋足」と書かれたものがあるが、両者は同一人名を記すものと看做される。そうしてみると後者の「成」は「武」を崩したものと判断できる。つまり「成」は「武」であり、多胡郡武美郷の某秋足を示すものであろう。これによって「成鯨」(Fig. 32—⑧)は「武鯨」と判読でき、武美郷の某鯨を示すと考えられる。東大門推定地付近で出土した平瓦の凸面に「鯨」とヘラ書きされたものがあり、上部を欠失しているが筆致などの点から同種のものともみられる。これ以外の「成成×」(第23次)・「成ア×」(同)についても「武」と判読してよいと判断される。今回出土のものの中で武美郷関係については、「□家主」(Fig. 32—⑳)が第一字の上半部を欠失するが残存する字面から「武」と判読でき、同郷の某家主を示すものとみられ、さらに「□□□」(Fig. 32—㉑)は尼寺跡採集資料(個人蔵)の中に「成右□」とあるものと同じであるとみられ、同郷の某右□を示すものとみられる。次に「×□成」(Fig. 32—㉒)の第一字は残画から「家」であると判読できる。第23次の表土下層からも「家成」と書かれたものが出土しており、布目面に深めに刻字する書法も類似する。この人名を示す「家成」については、『日本後紀』弘仁3年(812)8月庚寅条に、「上野国介従五位下息長真人家成」らが郡司を使って百姓を私役したことによって職を免ぜられている記事があるのが参考となる。「八阿□」(Fig. 32—㉓)は類例から「八阿子麻呂」の一部と判断でき、多胡郡八田郷の某阿子麻呂を示すものとみられる。「八□□」(Fig. 32—㉔)は、類例に「八子×」があり、第2字は「子」と判読できる。意味は不詳であるが、同じく八田郷に関係するものとみられる。

押印についてみると、「勢」(Fig. 32—㉕)と「勢」(Fig. 32—㉖)は勢多郡を示すものであるが、これまでの調査では勢多郡管下の郷名を示すと特定できる文字瓦は確認されていない。これは佐位郡関係のものが管下の郷名を記すものが多く、山田郡についても郷名を記すものが認められることと傾向を異にしている。昭和60年度に発掘調査が行われた8～9世紀に営まれた寺院ないしは官衙の可能性をもつ上西原遺跡(前橋市下大屋町他所在・旧勢多郡内)から、同範とみなされるものが前者については13点、後者については5点出土している。同遺跡では「勢」を押印するもの以外は出土しておらず、国分寺跡の出土状況と符号している。このことは、上野国分寺の創建ないしは修造に係わる、管下各郡郷の対応のあり方を示すものであろう。つまり瓦の貢進体

系の編成が、勢多郡では郡段階を主体したのに対し、佐位郡などでは郷単位にも及んでいたことが想定できる。また前述のように、修造の際に用いられたとみられる瓦のへら書きには、圧倒的に多胡郡管下の郷名を記すものが多く、それは管下6郷全てに及んでいる。資料の整理が十分でなく、また今後新資料の出土が期待できる段階では、このような理解は作業仮説であるに過ぎないが、文字瓦を通して上野国分寺の創建や修造の事情の一端を知ることができ、ひいてはその背景にある各地域の社会状況を窺える可能性のあることを示していよう。

Table.13 文字瓦 (Fig. 32)

番号	内容	種類	部位	出土位置	備考	図版番号
①	八	へら書き	平瓦凸面	27次 S J 19		PL 23-1
②	山	へら書き	丸瓦凸面	27次 S J 20	完形。布目は細かい。	22-1
③	園	押印(除刻)	平瓦凸面	27次 S J 21	下部、右部を欠失。	23-2
④	大	へら書き	平瓦凹面	27次 S J 21	ほぼ完形。縄目印きあり。	22-3
⑤	武秋足	へら書き	丸瓦凸面	27次 S J 23	下部を欠失。	23-3
⑥	八阿口	へら書き	平瓦凸面	27次 S J 23	下部を欠失。	23-4
⑦	里口	へら書き	平瓦凸面	27次 S J 23	下部を欠失。布目をナデ消す。	23-5
⑧	武鯨	へら書き	平瓦凸面	27次 S J 23		23-6
⑨	(家 _ナ) 口成	へら書き	丸瓦凹面	27次 S K 60	上部・右部を欠失。	23-7
⑩	尾	へら書き	平瓦凸面	27次 S K 66	上部・左部を欠失。	23-8
⑪	(子 _ナ) 八口	へら書き	平瓦凸面	27次 S K 67	凸面に粘土板刺ぎ取り痕が目立つ。下部を欠失。	23-9
⑫	口ロ	へら書き	平瓦凸面	27次 S K 67	上部を欠失。	23-10
⑬	生	押印(除刻)	平瓦凸面	27次 表 土	斜格子印きあり。右部を欠失。	23-11
⑭	山田口	へら書き	丸瓦凹面	27次 表 土	下部、右部を欠失。	23-12
⑮	(家 _ナ) 口	へら書き	平瓦凸面	27次 表 土	上部・左部を欠失。布目は細かい。	24-1
⑯	井	押印(除刻)	平瓦凸面	27次 表 土	縄目印きあり。6ヶ所以上に押印されている。布目をナデ消す。	24-2
⑰	若	へら書き	平瓦凸面	27次軽石混暗褐色土	上部・右部・左部を欠失。	24-3
⑱	山	へら書き	平瓦凸面	27次 表土下層	平行線印きあり。上部を欠失。	24-4
⑲	大	へら書き	平瓦凹面	27次焼土混暗褐色土	縄目印きあり。布目をナデ消す。	
⑳	大	へら書き	平瓦凸面	27次焼土混暗褐色土	凸面に粘土板刺ぎ取り痕が目立つ。縄目印きあり。布目をナデ消す。下部を欠失。	24-5
㉑	真	へら書き	平瓦凹面	27次 表土下層	凸面に粘土板刺ぎ取り痕が目立つ。布目をナデ消す。上部・右部・左部を欠失。	24-6
㉒	キ	へら書き	平瓦凸面	27次 表 土	右部を欠失。	24-7
㉓	三	へら書き	平瓦凹面	27次 表土下層	凹面は黒色。 凸面に粘土板刺ぎとり痕が目立つ。縄目印きあり。布目をナデ消す。左部を欠失。	24-8
㉔	勢	押印(除刻)	平瓦凸面	29次 表土下層	斜格子印きを伴う。下部を欠失。凹面割離。	24-9
㉕	勢	押印(隔刻・左字)	平瓦凸面	29次 表土下層	格子印きを伴う。2ヶ所以上に押印される。布目は細かい。	24-10
㉖	(武 _ナ) 口家主	へら書き	平瓦凸面	29次 表土下層	上部を欠失。	24-11
㉗	○	押印(竹管)	丸瓦凹面	29次 表土下層		24-12

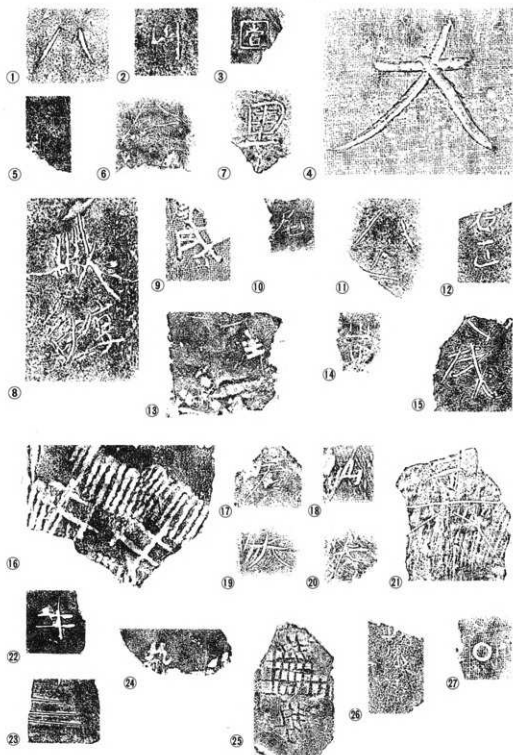


Fig. 32 文字瓦 縮尺1/3

Ⅵ ま と め

今回の調査の成果のまとめと課題とを示しておく。

第27次調査区北半部で検出された掘立柱建物（S B 12）について、次の点に注目される。まず検出状況では、(1)柱穴は方形の比較的大きな掘形をもつ、(2)掘形の埋土中に瓦片、平安時代以降の土器片などが混じっていない、(3)柱を抜き取った後、埋め戻された状況がみられる、(4)柱穴の重複はなく、建て替えの行なわれた様子はみられない、(5)S J 24など8世紀前期から中葉の竪穴式住居を切って造られている、(6)S J 24は周辺の整地と同じ頃に人為的に埋められた状況がみられる。またその位置などでは、(7)東側柱列と塔の西側柱列とがほぼ揃う位置にある、(8)方位が塔に近似する、(9)東側に方位を同じくする柱列（S A 03）を伴う、(10)この北西に同様の柱穴掘形をもつ2×2間の掘立柱建物（S B 11）が検出されている、などの特長がみられる。今回の調査ではS B 12に関連する遺構はS A 03以外には確認できなかったが、以上の点からS B 12は(イ)S J 24との切り合い関係から8世紀中頃を上限とするが、柱穴の状況からみて比較的古い時期のものである、(ロ)1期のみのものであり、国分寺の伽藍の一部といった恒久的な建物ではない、(ハ)配置・方位の状況から塔と関連するものである可能性が高い、(ニ)二面廂の構造と、柱列を伴うことから、一群の主屋的な施設であると推定される、といった性格を認めることができる。これらのことは、断断はできないものの、S B 12が塔などの造営に関連して設置された諸施設の中で、中心となる建物であったことを示している。塔などの造営については、『続日本紀』天平勝宝元年（749）5月と閏5月に当国国分寺に知識物を献納したことにより全国で5名が外従五位下を授けられた記事があるが、その中に上野国碓氷郡人外従七位上石上部君諸弟と勢多郡少領外従七位下上毛野朝臣足人の2名が掲げられているのが注目される。この記事は、天平19年（747）11月に出された、郡司で任務に堪える力をもつ者を国分寺の造営に当たらせ、3年以内に塔・金堂・僧坊を造り終えたならば、またよく命令に従い修造を行なうならば、子孫を絶えることなく郡領に任用するという督促の詔に対応する措置と看做されるものである。これによって、上野国分寺の塔などは749年には一応の完成をみたものと判断される。今回の調査の検出状況を直ちにこの史料に結びつけることはできないが、8世紀中頃の竪穴式住居が人為的に埋められていることと、この史料による造営時期とはほぼ一致するものであり、それを切って造られているS B 12が1期のみで廃されていることを考慮すると、このS B 12は創建時期の造営関係の施設であるとみるのが妥当であろう。これに関連する遺構としては、第24次調査で検出されたS B 11があるのみであるが、この寺城南西隅部に造営関係の施設が集中して設けられていたことも考えられ、今後さらに調査を進める必要がある。

第27次調査区南半部で検出された南辺築垣（S F 01）と、それを切って造られている2軒の竪穴式住居（S J 21・22）との関係に注目される。南辺築垣についてはこれまでに、東から第16次、第23次、第23次西拡張、第9トレンチ、第24次の各調査で、その位置と構造についての確認を行ってきた。その概要については『概要5』（1984年）で述べているが、南大門以東では方位はE—3°50′—Nを示すが、西半部は南大門より西へ100mの位置で10m北に寄る、屈曲する形状

となっている。今回の調査でもこの屈曲に沿う位置で築垣が検出されたが、その本体は完全に滅失し、基部の上部も若干削平をうけているとみられる状況であった。S J 21付近でみると、残存基部の上面は標高127.30mであり、寺域内の地表面より僅かに高い程度であったとみられる。築垣の構造については、基部は旧表土層をロームの2次堆積とみられる黄褐色砂質土面まで掘り下げ、そこに粘性の強い黒褐色土を積んで造られていることがわかった。この西側の第24次調査でも、同様に黄褐色ローム（『概要5』18頁では「整地土」と記した）の上に基部を造っているのが確認されているが、掘り込みの深さは40cm前後と浅めである。この基部の北半部を切って造られたS J 21・22が11世紀初頭から前半のものであることから、この部分では南辺築垣は11世紀初頭には既に全壊の状態であったと判断できる。関連する史料をみても、長元3年（1030）に作成された上野国司の不詳解由状の草案である「上野国交替実録帳」金光明寺項には、寛仁4年（1020）には既に「築垣壹週 四面貳町 長參佰貳丈壹尺」・「南大門壹宇」・「西大門壹宇」・「東大門壹宇」などが無実（滅失）となっていたことが記されている。つまり1020年には四周の築垣と各面に設けられている大門ともに全壊しており、その後も放置されたままであると記録されているのである。この史料の内容と、今回の調査の結果とは、その状況、時期ともに符号するものである。昭和56年度の推定東大門周辺の調査でも、東辺築垣に近接するとみられる位置で、10世紀末から11世紀前半の竪穴式住居（S J 02・03・04・07）が検出されており、前記の史料の内容の信憑性を高めている。また、削平された基部の上面に天仁元年（1108）に降ったとされる浅間B軽石の純層があるのが確認されたが、南大門周辺の調査でも瓦散布面およびその上部の瓦包含層の上に浅間B軽石の純層のあることが確認されている。このことは、11世紀初頭までに全壊した南辺築垣が、その後再建されなかった可能性の強いことを示している。以上の検出状況と史料とから、築垣および各面の大門は、11世紀初頭までには全壊しており、その後も再建されなかったものと看做することができる。

南辺築垣の外側に溝が設けられていることは南大門付近の調査で確認されているが、今回の調査でも幅7～8mの素掘りの溝が検出された。この底部は淡黄灰色砂質土中にあり、築垣残部上面から約190cm下となる。ただこの南岸部は、後世に掘り直しされた状況が認められ、現状が直ちに原形状を示すものではない。この南側にはS J 21と同時期の竪穴式住居（S J 20）があるが、この検出面は標高126.75mであり、カマドの検出状況からみて旧表土の削平は僅かであると判断される。これと南辺築垣北側の自然堆積層上面との比高差をみると、後者が約40cm高くなっている。このことから、この付近はもともと南に向かって緩く下がる地形であったこと、国分寺の造営では寺域外に較べて寺域内を一段高くするように造られていたことが知られる。また南辺築垣の南側は、廃絶後は「J」型の窪地状となっていたとみられ、中世以降にはこの南向き斜面にはいくつかの墓塚が設けられていたようである。また性格不明の大土壇（S K 60）の造られていた状況も認められる。

南大門の南側の第28次調査では参道の痕跡を確認することはできず、後世に設けられた溝状の

掘り込みが検出された。これは寺域中央部を南北に貫くS D02の南側への延長部分とみられる。中央部分に流水のあった痕が認められ、旧寺城内の水を染谷川に流すための排水溝である可能性がある。また寺域中央部という位置については、地形からみて南大門の外側に切り通し状の参道が設けられており、これを利用したことによる可能性も考えられる。

金堂南側の第29次調査では、これまでの調査と研究の経過から中門の検出が期待されたが、それを示す遺構を確認することはできず、根石状遺構の存在と礎石を破砕したものともみられる多数の石片の出土とから、この近くに中門の存在した可能性の高いことを推定するにとどまった。S 15・E 28.3で検出された自然石は、その出土位置と大きさからみて中門の礎石であった可能性がある。また回廊と判断される遺構も検出されず、これによって回廊の確認はほぼ不可能となった。掘立柱建物(S B13)は遺存状況が悪く、その時期や性格を明確にすることは困難であるが、東大門推定地の近くでも3×2間の小規模な掘立柱建物(S B07)が検出されており、今後の検討の材料となる。

金堂からその南側にかけては、南北方向に尾根状に地山が高くなっている。そしてそれは北から南に向って次第に低くなっていくのが認められる。これを金堂と南大門の礎石上面の標高で較べると、南大門の方が215cm低い位置にあり、金堂南縁の旧地表面に較べても約90cm低くなっている。この尾根状の部分からは、縄文時代中期の竪穴式住居(S J 28)、古墳時代後期の竪穴式住居(第22次調査、S J 09・10・11)、奈良時代前期の竪穴式住居(S J 25・26・27)などが検出されており、各時代にわたって住居地域とされていたことが知られる。金堂の位置の選定に際して、この地形上の条件が考慮されたことを窺わせるものである。

国分寺廃絶後の様相を窺わせるものとして、多数の墓塚が検出された。金堂周辺の墓塚としては、金堂基壇上(第25次調査)、金堂西側(第18次調査)でその分布状況が確認されているが、この金堂南側部分は濃密な状況であると言える。また、この部分では井戸遺構が検出されず、また小型の方形柱穴もその数が少ないことに注目される。金堂北西の第26次調査区とは同種の土壌(S K 70・71)の存在が共通するが、一方には墓塚は無く、井戸遺構と多数の小柱穴が検出されている点で様相を異にしている。資料の整理と検討が不十分な段階で結論を出すことはできないが、廃絶後の寺地の利用に一定の区分のあったことを窺うことができる。

今後の調査としては、寺域南半部の国分寺創建以前および造営に伴う遺構の存在状況の確認と併せて、国分寺の衰退期および廃絶後の土地利用の状況をより詳細に確認するための資料の整理を進めることが必要となる。



調査区全景空中写真



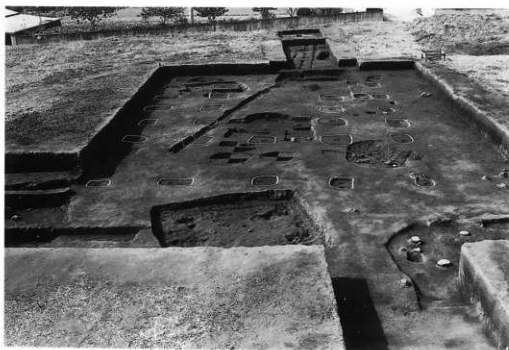
1. 第27次調査区全
景・上部の土壇
は塔跡



2. 第27次調査区全
景 (南から)



1. 第27次調査区主要部



2. 第27次調査区 S B12周辺検出状況 (東から)



1. 第27次調査区
S B 12・S J 16重複状
況 (西から)



2. 第27次調査区
S B 12・S J 16検出状
況 (西から)



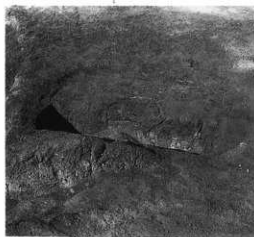
3. 第27次調査区
S B 12・S J 17検出状
況 (西から)



1. 第27次調査区
S B 12・S J 24検出状
況 (南から)



2. 第27次調査区
S K 56検出状況 (南か
ら)



3. 第27次調査区 S B 12身舎柱穴掘形断面
(南から)



4. 第27次調査区 S B 12身舎柱穴掘形断面
(南から)



1. 第27次調査区 南辺築垣周辺検出状況 (西から)



2. 第27次調査区 S F 01・S J 21・S J 22重複状況 (東から)



1. 第27次調査区
南辺築垣断面 (W40ラ
イン) (東から)



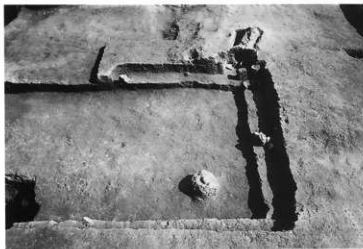
2. 第27次調査区
S J 21検出状況 (西か
ら)



3. 第27次調査区
S J 22検出状況 (西か
ら)



1. 第27次調査区
S J 18検出状況 (西から)



2. 第27次調査区
S J 20検出状況 (西から)



3. 第27次調査区
S D 01・S K 62検出状況 (西から)



1. 第27次調査区
S J 23・S K 67周辺検
出状況 (西から)



2. 第27次調査区
S J 23・S K 67周辺検
出状況 (南から)



3. 第27次調査区
E 10～W 30検出状況
(東から)



1. 第28次調査区全景（南から）



2. 第28次調査区全景（西から）



1. 第29次調査区全
景・上部中央の
土壇は金堂跡



2. 第29次調査区
全景 (南から)



1. 第29次調査区 北半部 (S20ライン以北) (東から)



2. 第29次調査区 南半部 (S20ライン以南) (東から)



1. 第29次調査区
根石状遺構検出状況
(北から)



2. 第29次調査区
根石状遺構検出状況
(西から)



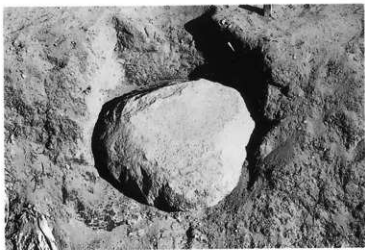
3. 第29次調査区
根石状遺構下部検出状況
(南から)



1. 第29次調査区
S B 13検出状況 (南から)



2. 第29次調査区
S B 13検出状況 (東から)



3. 第29次調査区
S 19・E 12礎石検出状況 (西から)



1. 第29次調査区
S J 25検出状況 (西から)



2. 第29次調査区
S J 26検出状況 (西から)



3. 第29次調査区
S J 27検出状況 (南西から)



1. 第29次調査区
S J 28検出状況 (北から)



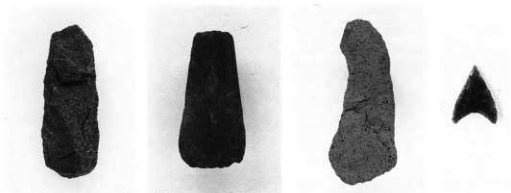
2. 第29次調査区
S T 52検出状況 (東から)



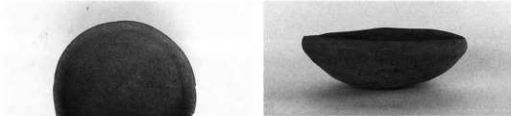
3. 第29次調査区 S T 60検出状況
(南から)



4. 第29次調査区 S 15・E 28礎石埋め込み状況
(南から)



1. 27次 打製石斧 2. 27次 S J 20 磨製石斧 3. 27次 S K 58 打製石斧 4. 27次 石鏃



6. 27次 S J 16 土師器杯



5. 27次 S J 16 土師器杯 上は内面ヘラ記号



7. 27次 S J 17 須恵器杯



8. 27次 S J 17 土師器杯



9. 27次 S J 17 土師器小型壺 下は底部木葉痕



1. 27次 S J 21 土師器坏



2. 27次 S J 21 土師器坏



3. 27次 S J 21 土師器坏



6. 27次 S J 22 土師器坏



7. 27次 S J 22 土師器坏



8. 27次 S J 22 土師器坏



4. 27次 S J 21 土師器堯



5. 27次 S J 21 土師器皿



9. 27次 S J 22 土師器坏



10. 27次 S J 22 土師器坏



11. 27次 S J 20 土師器皿



1. 27次 S J 23 土師器杯



2. 27次 S J 23 土師器杯



3. 27次 S J 23付近 掛機部
上内面 下機部



4. 27次 S J 23付近 鉄釘類



5. 27次 S J 23付近 羽口片



8. 27次 S J 24付近 須恵器杯



6. 27次 S J 24付近 土師器杯



7. 27次 S J 19 土師器壺



9. 27次 S K 60 内耳壺型土器



1. 29次 S J 25 土師器坏



2. 29次 S J 25 土師器坏 内面暗文



4. 29次 S J 26 土師器坏



3. 29次 S J 25 土師器堯 下墨書「戸下」



5. 29次 S J 28 炉 縄文土器 堯



6. 29次 表土 奈良三彩陶片 上外面 下内面



1. 29次 S T 52 素焼き皿



2. 29次 S T 52 素焼き皿



3. 29次 S T 28 素焼き皿



4. 29次 S T 16 素焼き香炉 下底部



5. 29次 S T 54 五輪塔 空風輪



6. 29次 S T 54 五輪塔 上火輪 下水輪



1. 27次 S J 20 カマド 丸瓦 凸面にヘラ書き「山」

2. 27次 S J 23付添 焼土壱 平瓦 凸面にヘラ書き「魚」(カ)



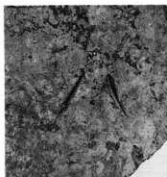
3. 27次 S J 21 平瓦 凹面にヘラ書き「大」

4. 27次 SK67 平瓦 凸面にヘラ書き「子」



5. 27次 上 軒丸瓦 下 軒平瓦

6. 27次表土 瓦磚 上 側面



1. 27次 S J 19 「八」



2. 27次 S J 21 押印「圖」



3. 27次 S J 23 「武秋足」



4. 27次 S J 23 「八阿」



5. 27次 S J 23 「里」



6. 27次 S J 23 「武鯨」



7. 27次 S K 60 (裏) 「白成」



8. 27次 S K 66 「尾」



9. 27次 S K 67 (裏) 「八活」



10. 27次 S K 67 「口」



11. 27次表土 押印「生」



12. 27次表土 「山田」



1. 27次表土 (密) 成



2. 27次表土 押印「井」



3. 27次「若」



4. 27次表土 「山」



5. 27次 「大」



6. 27次表土 「真」



7. 27次表土 「キ」



8. 27次表土 「三」



9. 29次表土 押印「勢」



10. 29次表土 押印「勢」(左字)



11. 29次表土 (密) 成



12. 29次表土 竹管「〇」

参 考 文 献 (近年刊行の上野国分寺関係の報告・論文など)

- 三舟隆之「上野・下野における初期寺院の成立」 考古学研究 125 1985年
坪井清足他「古代日本を発掘する2 飛鳥の寺と国分寺」 岩波書店 1985年
群馬県教育委員会文化財保護課「ぐんまの文化財」 1985年
群馬県『群馬県史 資料編4 原始古代4 文献』史料解説 1985年
煥乎堂「国指定・県指定 群馬県の史跡名勝天然記念物」 1985年
上毛新聞社『群馬の文化財 美 ふるさとを誇る』 1986年
西 史朗「上毛野と『物部』」 東アジアの古代文化 46号 1986年
金井塚良一他『討論古代の群馬・埼玉』 あさを社 1986年
前沢和之「文化財レポート 史跡上野国分寺跡出土の文字瓦について」 日本歴史 第454号
1986年
前沢和之「衰退期を示す竪穴住居跡—群馬県上野国分寺跡—」 季刊考古学 第15号 1986年

調 査 関 係 者 (敬称略)

発掘作業員

一倉ヤヨイ・入沢喜一・入沢タケノ・大塚みつゑ・上原隆子・金井モトエ・川端キヨ子・菊地松之助・白井テル・住谷紀子・田原かねえ・塚田マサエ・塚田みさほ・塚田光代・塚田幸雄・仲野俊雄・東野菊江・東野トクエ・東野ノブ子

整理補助員

柏瀬和彦・湯本俊明・小林康典・間濑幸代・横澤永子・萩原 泉(以上群馬大)・石原清和(芝浦工大)・持谷明宏(中央大)・松田万里子・村吉俊子

協 力

群馬町教育委員会・前橋市教育委員会・群馬町東国分地区・群馬県埋蔵文化財調査事業団

この他に故住谷隆司・住谷宗七・塚田茂樹(東国分区長)・中島義雄ほか多くの方々のご協力とご指導を得た。

史跡上野国分寺跡発掘調査概要 6

印刷 昭和61年3月25日

発行 昭和61年3月30日

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町1丁目1-1

TEL 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 株式会社 前橋印刷所